兵庫県文化財調査報告　第228冊

西宮市

北口町遺跡

西宮北口駅北東地区震災復興第二種市街地再開発事業
に伴う発掘調査報告書

２００２年３月

兵庫県教育委員会

西宮市

北口町（きたぐちちょう）遺跡

西宮北口駅北東地区震災復興第二種市街地再開発事業
に伴う発掘調査報告書

２００２年３月

兵庫県教育委員会

解体と並行するＡ・Ｂ地区の調査

Ｃ地区の調査とポンテリカデッキ

弥生時代前期の土器

弥生時代後期の土器

例　言

1．本書は西宮市北口町４丁目に所在する北口町遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は西宮北口駅北東地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴うもので、住宅・都市整備公団関西支社　震災復興事業本部　西宮再開発事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査を担当した。

3．それぞれの調査担当者は下記のとおりである。

	遺跡調査番号	調査担当者
確認調査（平成９年度）	９７０３０６	種定淳介・小川良太・平田博幸・丹家昌博
本発掘調査（平成９年度）	９７０４９８	種定淳介・水口富夫・矢野治巳
本発掘調査（平成10年度）	９８０１０６	中川　渉・深江英憲

4．整理作業は都市基盤整備公団と契約を交わし、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が作業を実施した。

5．本文の執筆は、種定淳介・中川　渉・深江英憲が本文目次のとおり分担し、編集は中川が担当した。

6．本書に使用した標高は大阪湾平均海水準（O.P.）である。

7．本書で使用した写真・地図のうち、写真図版１の航空写真は昭和23年米軍撮影のもの、第１図の地図は国土地理院発行25,000分の１「西宮」（平成10年）、第２図の地図は国土地理院発行10,000分の１「西宮北部」（昭和７年）『明治前期・昭和前期神戸都市地図』柏書房刊（平成７年）所収、第３図の地図は西宮市発行2,500分の１「広田・瓦木」（昭和46年）を使用した。

8．本書にかかる北口町遺跡の写真・図面・遺物などは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町２－１－５）が保管している。

9．発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の御助力・御教示を得た。記して感謝の意を表します。（敬称略）
青木哲哉（立命館大学）、西川卓志・合田茂伸（西宮市教育委員会）、森岡秀人・竹村忠洋（芦屋市教育委員会）、前田佳久・須藤　宏・関野　豊（神戸市教育委員会）、川村慎也、田中秀明

目　次

第１章　はじめに
第１節　遺跡の立地と周辺の環境（中川）…… 1
第２節　調査の経緯
１．事前協議の経過（中川）…… 2
２．確認調査（中川）…… 3
３．本発掘調査（種定・中川）…… 4
４．整理作業（中川）…… 6

第２章　調査の成果

凡　例…… 7
第１節　基本層序（中川）…… 7
第２節　弥生時代前期の調査（深江・種定）…… 8
第３節　弥生時代後期～古墳時代前期の調査（中川・深江）…… 13
第４節　古墳時代中期～後期の調査（中川・種定）…… 23
第５節　平安時代～鎌倉時代の調査（中川）…… 26

第３章　まとめ
第１節　弥生時代前期（深江）…… 34
第２節　弥生時代後期～古墳時代前期（中川）…… 35
第３節　古墳時代中期～後期（中川）…… 35
第４節　平安時代～鎌倉時代（中川）…… 36

挿図目次

第１図　遺跡の位置（1：25,000「西宮」）…… 1
第２図　昭和７年当時の北口町と周辺の遺跡（1：10,000）…… 2
第３図　事業予定地と調査対象範囲（1：2,500）…… 3

図版目次

図版１　調査区位置図
図版２　調査区設定図
図版３　土層断面図（１）
図版４　土層断面図（２）
図版５　弥生時代前期全体図
図版６　弥生時代前期平面図
図版７　弥生時代前期断面図
図版８　弥生時代後期～鎌倉時代全体図（Ａ・Ｂ地区）

図版9　弥生時代後期～鎌倉時代全体図（C地区）
図版10　弥生時代後期～古墳時代前期全体図
図版11　竪穴住居ＳＨ001
図版12　竪穴住居ＳＨ002
図版13　竪穴住居ＳＨ003・004
図版14　竪穴住居ＳＨ005・006
図版15　竪穴住居ＳＨ007
図版16　掘立柱建物ＳＢ006・001
図版17　掘立柱建物ＳＢ002・003
図版18　掘立柱建物ＳＢ004・005
図版19　土坑
図版20　溝
図版21　古墳時代中期～後期全体図
図版22　横列
図版23　土坑
図版24　平安時代～鎌倉時代全体図
図版25　掘立柱建物ＳＢ007・008
図版26　掘立柱建物ＳＢ009・010
図版27　掘立柱建物ＳＢ011・012
図版28　掘立柱建物ＳＢ013・014
図版29　井戸ＳＥ001～003
図版30　土坑（1）
図版31　土坑（2）
図版32　弥生時代前期の土器（1）
図版33　弥生時代前期の土器（2）
図版34　弥生時代前期の土器（3）
図版35　弥生時代後期～古墳時代前期の土器（1）
図版36　弥生時代後期～古墳時代前期の土器（2）
図版37　弥生時代後期～古墳時代前期の土器（3）
図版38　古墳時代中期～後期の土器
図版39　平安時代～鎌倉時代の土器（1）
図版40　平安時代～鎌倉時代の土器（2）
図版41　石器（1）
図版42　石器（2）

巻頭図版目次

巻頭図版1
解体と並行するA・B地区の調査
C地区の調査とポンテリカデッキ

巻頭図版2
弥生時代前期の土器
弥生時代後期の土器

写真図版目次

写真図版1　航空写真
昭和23年当時の北口町周辺（米軍撮影）
写真図版2　全景写真（1）
1．A・B地区（北西から）
2．B地区（西から）
写真図版3　全景写真（2）
1．C－東区（南から）
2．C－中央区（北から）
写真図版4　全景写真（3）
1．C－西区（南から）
2．C－拡張区（北から）
3．基本層序
写真図版5　弥生時代前期（1）
1．溝ＳＤ001～003（南西から）
2．溝ＳＤ002・003（北から）
3．溝ＳＤ002（北から）
写真図版6　弥生時代前期（2）
1．溝ＳＤ002・003（南東から）
2．溝ＳＤ002　土器出土状況（アップ）
3．同　右上（東から）
4．同　左（北から）
5．溝ＳＤ001断面（北東から）
6．溝ＳＤ002断面（南東から）
7．同　右上（南東から）
8．溝ＳＤ003断面（北西から）

写真図版７　弥生時代後期～古墳時代前期（１）

１．竪穴住居ＳＨ001（南から）

２．竪穴住居ＳＨ002（南西から）

３．竪穴住居ＳＨ003・004（北から）

写真図版８　弥生時代後期～古墳時代前期（２）

１．竪穴住居ＳＨ005（南西から）

２．竪穴住居ＳＨ006（東から）

３．竪穴住居ＳＨ007（北西から）

写真図版９　弥生時代後期～古墳時代前期（３）

１．土坑ＳＫ006上層土器出土状況（西から）

２．同　上　完掘状況（西から）

３．土坑ＳＫ005土器出土状況（南東から）

４．土坑ＳＫ003土器出土状況（北から）

５．土坑ＳＫ001（西から）

６．同　上　断面（西から）

７．溝ＳＤ006土器出土状況（東から）

８．同　上　断面（南から）

写真図版10　弥生時代後期～古墳時代前期（４）
古墳時代中期～後期

１．掘立柱建物ＳＢ004（南西から）

２．掘立柱建物ＳＢ005（南東から）

３．土坑ＳＫ011（西から）

４．土坑ＳＫ012（東から）

写真図版11　平安時代～鎌倉時代（１）

１．掘立柱建物ＳＢ009（南から）

２．掘立柱建物ＳＢ010・011（南から）

３．掘立柱建物ＳＢ011・013（南から）

写真図版12　平安時代～鎌倉時代（２）

１．掘立柱建物ＳＢ012（南から）

２．掘立柱建物ＳＢ014（南から）

３．掘立柱建物ＳＢ014と両落ち溝ＳＤ023～026（南から）

４．南落ち溝掘削時の鍛冶（北西から）

写真図版13　平安時代～鎌倉時代（３）

１．井戸ＳＥ002（南から）

２．同　上　断割り（南から）

３．井戸ＳＥ003（南から）

４．同　上　断割り（南から）

５．井戸ＳＥ001（北から）

６．ＳＢ011、柱穴Ｐ154断割り（西から）

写真図版14　平安時代～鎌倉時代（４）

１．土坑ＳＫ013（南から）

２．土坑ＳＫ014土器出土状況（東から）

３．土坑ＳＫ015（南から）

４．土坑ＳＫ017（南から）

５．土坑ＳＫ016（東から）

６．同　上　断面（南から）

７．土坑ＳＫ018（東から）

８．馬骨出土状況（アップ）

写真図版15　調査状況

１．再開発が進む百舌鳥北口駅北東地区

２．建物の解体と発掘調査

３．ボンテリカデッキと発掘調査

４．ボンテリカデッキから見た作業状況

５．掘削状況

６．土器検出状況

７．実測状況

８．高校生の発掘体験

写真図版16　遺物　弥生時代前期の土器（１）

写真図版17　遺物　弥生時代前期の土器（２）

写真図版18　遺物　弥生時代前期の土器（３）

写真図版19　遺物　弥生時代前期の土器（４）

写真図版20　遺物　弥生時代前期の土器（５）

写真図版21　遺物　弥生時代後期～古墳時代前期の土器（１）

写真図版22　遺物　弥生時代後期～古墳時代前期の土器（２）

写真図版23　遺物　弥生時代後期～古墳時代前期の土器（３）

写真図版24　遺物　弥生時代後期～古墳時代前期の土器（４）

写真図版25　遺物　古墳時代中期～後期の土器

写真図版26　遺物　平安時代～鎌倉時代の土器（１）

写真図版27　遺物　平安時代～鎌倉時代の土器（２）

写真図版28　遺物　打製石器

写真図版29　遺物　磨製石器

写真図版30　遺物　砥石

第1章　はじめに

第1節　遺跡の立地と周辺の環境

北口町遺跡は西宮市北口町4丁目に所在する。現地は阪急電鉄西宮北口駅の北東側にあたり、早くから市街化の影響を受けてきた。しかし鉄道が開通する大正年間以前は、旧高木集落から南西に少し外れた水田地帯であった。北口町から武庫川までの間は現標高5～7mの平坦な沖積平野となっており、当時は武庫川の堤防まで一面の水田が広がり、処々の微高地に「瓦林」「高木」などの集落が散在するという景観が展開した（第2図）。遺跡地から現海岸線までは南へ約3km、武庫川までは東へ約1.5kmの距離がある。

周辺の地形区分は武庫川下流域右岸の三角洲帯にあたり、河道が固定される以前は武庫川の営力による沖積作用を大きく受けたものと考えられる。地形図を観察すると、高木から北口町を結ぶ集落域の南東側に武庫川の旧流路が読み取れ、両者は同一の自然堤防上に立地することが予想される。

この自然堤防は北東－南西方向の細長いもので、北口町遺跡における確認調査ではこれより北西側には続いていない。北口町遺跡から200m西側の甲風園遺跡（弥生時代前期）との間にはやや小規模な谷状地形が存在するようである。

また南西側については、平成10年度に西宮市教育委員会が行った西宮北口駅南駅前での確認調査で水田土壌層を検出したという観察結果が出ている。それはさらに200m南西側で平成11年度に兵庫県教育委員会が行った高松町遺跡の本発掘調査の成果でも裏付けられ、周辺に弥生時代後期の水田面が広がることが判明している。

北口町遺跡の南東側は1～2mの比高差をもって低くなっており、ここにいつの時点かで段丘崖が形成されたことを物語っている。しかし700m南東側には別の微高地に立地する高畑町遺跡が存在する。平成7・8年度に兵庫県教育委員会が行った本発掘調査では、弥生時代後期・古墳時代・中世の集落が検出されており、北口町遺跡と共通する内容が認められる。

上記の段丘崖面を南にたどると、武庫川河口部の古代の入り江に面する津門に至る。周辺には大塚山古墳・津門稲荷山古墳・津門銅鐸出土地などが存在する。武庫川下流域では古墳時代以前に遡る遺跡が他にあまり知られておらず、この段丘面の地理的な重要性を物語っている。

第1図　遺跡の位置（1：25,000「西宮」）
1. 北口町遺跡　2. 甲風園遺跡　3. 高畑町遺跡　4. 高松町遺跡
5. 大塚山古墳　6. 津門銅鐸出土地　7. 津門稲荷山古墳

第2節　調査の経緯

1．事前協議の経緯

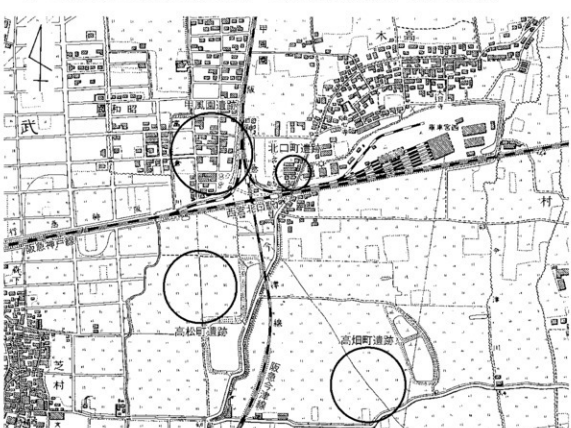
北口町付近は駅前ということもあって早くから市街地化しており、調査以前は北口市場を始めとする低層建築主体の商業地・住宅地であった。そこへ平成7年1月17日の阪神・淡路大震災が発生し、西宮北口駅北東地区だけでも全300haの約9割が全壊するという甚大な被害をこうむった。

この状況を立て直し、早期の復興を図るため、平成7年3月17日には「西宮北口駅北東地区震災復興第二種市街地再開発事業」が都市計画決定され、平成8年5月7日には住宅・都市整備公団施行の事業として建設大臣の施行規程及び事業計画の認可公告がなされた。さらに平成9年3月6日には管理処分計画も同大臣の認可が下り、起工へ向けての動きが本格化した。

一方、文化財サイドも震災復興事業に対応して、平成7年3月29日には「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関する基本方針」を打ち出すなど、文化庁と兵庫県教育委員会の協議の中で対策が講じられた。また4月1日には兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に復興調査班が組織され、6月1日には他府県からの最初の支援職員を受け入れるなど復興調査に対する体制を整え、順次調査に着手していった。

平成9年4月30日、住宅・都市整備公団　震災復興事業本部と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所は復興住宅供給事業に伴う埋蔵文化財についての協議を行った。その中で「西宮北口駅北東地区震災復興第二種市街地再開発事業」については、確認調査を行う方向で再協議が必要との認識がなされた。

次いで7月8日には公団側より現地立ち会いの要請を受け、確認調査への運びとなった。



第2図　昭和7年当時の北口町と周辺の遺跡（1：10,000）

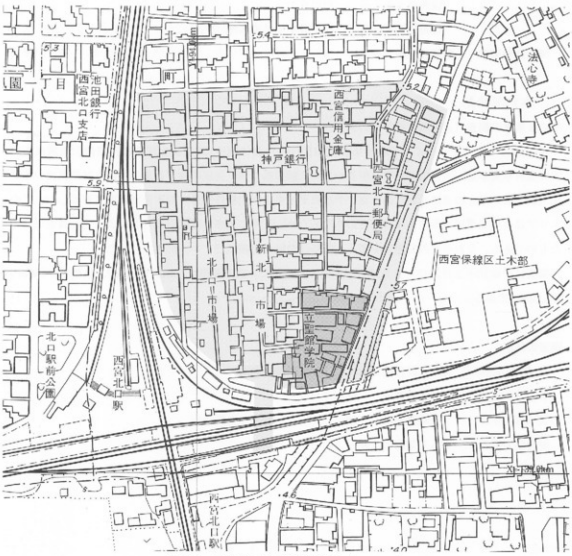
２．確認調査（遺跡調査番号：970306）

事業地から阪急宝塚線を挟んだ西側には周知の遺跡である「甲風園遺跡」が存在しているが、事業地内は早い段階に市街地化したため埋蔵文化財に関するデータがほとんどない状況であった。そこで兵庫県教育委員会は平成９年７月29日付け　おほ74－22による住宅都市整備公団関西支社　震災復興事業本部　西宮再開発事務所長からの依頼に基づき、事業地内の埋蔵文化財確認調査を実施した。

確認調査は建物の解体・撤去の進捗に応じて順次実施したため、８月27日から翌年の３月12日の期間で数回に分けて行われた。

調査は事業地内全域に２m×２mあるいは２m×３mの調査グリッドを20m前後の間隔で設けて実施した。特に遺構の確認された事業地南東部では、グリッドを濃密に設定するとともに、事業の工程上先行調査が必要なNo.30・31グリッドを拡張・調査した。最終的に全体で41箇所の調査グリッドを設けて、確認調査を行った。

調査グリッドで検出した遺構・遺物および断面観察の所見を総合した結果、事業地の南東部に高木集



第３図　事業予定地と調査対象範囲（1：2,500）

落から続く三日月形の微高地の南端が存在し、そこに遺跡が立地することが判明した。この範囲に該当する調査グリッドはNo.28～31・No.35～39の9箇所で、各グリッドでは柱穴・溝・土坑などの遺構が見つかり、弥生時代～中世の遺物が出土した。しかし遺構が立地する微高地の幅は比較的狭く、土層断面の状況は北および西に向かって緩やかに傾斜することが看取できる。従って事業地の西半部には小規模な谷地形が存在しており、「甲風園遺跡」の立地する微高地と今回見つかった微高地は区別しなければならないことになる。

確認調査実施の時点ではこの調査を周知の「甲風園遺跡」の範囲確認として捉えていたが、調査の結果見つかった遺跡は「甲風園遺跡」とは別の遺跡であることが明らかとなったため、以後本遺跡を新たに「北口町遺跡」と呼称することにした。

調査の体制

調査の主体	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	
事務担当者	企画調整班	種定淳介
調査担当者	企画調整班	種定淳介
	復興調査第1班	小川良太
	復興調査第2班	平田博幸・丹家昌博
調査協力業者	安西工業株式会社	

3．本発掘調査

平成9年度の調査（遺跡調査番号：970498）

確認調査の成果を受けて、平成10年3月13日付け　おは74－106による住宅都市整備公団関西支社震災復興事業本部　西宮再開発事務所長からの依頼に基づき、兵庫県教育委員会は調査対象範囲の北半部（駅と仮店舗との連絡通路であるポンテリカデッキより北側の部分）の本発掘調査に着手した。このエリアは再開発事業東街区の建物部分にあたるため、工事の進捗に支障をきたさぬよう先行調査を行ったものである。なお事業の緊急性を鑑み、調査は公団の直接執行という形態で行った。

調査は平成10年2月19日～3月13日の期間で実施した。調査面積はA地区が528m²、B地区が560m²、計1,088m²である。

調査の体制

調査の主体	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	
事務担当者	企画調整班	種定淳介
調査担当者	企画調整班	種定淳介・水口富夫・矢野治巳
調査協力業者	安西工業株式会社	

平成10年度の調査（遺跡調査番号：980106）

平成10年7月16日に住宅・都市整備公団　震災復興事業本部長と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所長との間で、西宮北口駅北東地区における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に関する確認書を締結した。これを受けて同日付け　おほ74－25による住宅都市整備公団関西支社　震災復興事業本部　西宮再開発事務所長からの依頼に基づき、兵庫県教育委員会はポンテリカデッキから南側（C地区）の本発掘調査を行った。執行形態は前年度と同様、公団の直接執行による。

当年度の調査にあたっては周辺の工事の遅延により残土の搬出が不可能となっていたため、調査区を東西に3分割し、東側から順次反転させながら調査を行った。さらに調査区の西外側へ弥生時代前期の溝が延長するという状況が認められたため、10月29日に改めて公団と教育委員会との間で協議を行い、再度「確認書」を締結した上で、一部調査区を拡張した。最終的には4分割で調査を実施したことになる。

調査は平成10年7月21日～11月18日の期間で実施した。調査面積は1,339m²である。

調査成果については、実施期間中に「北LI町遺跡発掘ニュース」Vol.1～Vol.6を随時発行し、ポンテリカデッキにて掲示・配布した。

調査の体制

調査の主体　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
事務担当者　　企画調整班　　水口富夫
調査担当者　　復興調査班　　中川　渉・深江英憲
調査補助員　　中谷悟史・山川かおり・岡本陽子
調査協力業者　安西工業株式会社

4．整理作業

出土品の整理作業および報告書作成は平成12・13年度の2箇年で、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

整理作業は出土遺物の①水洗→②ネーミング→③接合・補強→④実測・拓本→⑤復原→⑥写真撮影の順に実施した。さらに遺物実測図・遺構図とともに⑦トレース→⑧レイアウトを行い、原稿執筆・編集→印刷を経て報告書刊行となる。

平成12年度の作業

土器のネーミング、接合・補強、実測、復元、写真撮影、遺構図補正を行った。担当職員は以下のとおりである。

調査担当者　種定淳介・中川　渉・深江英憲

担当嘱託員　平松ゆり・島田留里・池田悦子・香川フジ子・岸野奈津子・松本嘉子・早川亜紀子
木村淑子・前田千栄子・鈴木まき子・今村聡美・岡田祥子・八木富美子・河上智晴
西岡敬子・藤井光代

日々雇用職員　友久伸子・高野佐智子・三島重美

平成13年度の作業

トレース、レイアウト、印刷を行った。担当職員は以下のとおりである。

調査担当者　種定淳介・中川　渉・深江英憲

担当嘱託員　島田留里

なお磨製石包丁の実測は上田健太郎が行った。

完成なったアクタ西宮

第２章　調査の成果

凡　例

１．調査区の設定

北口町遺跡は平成９年度と平成10年度の２箇年度に分けて調査した。平成９年度の調査区は対象範囲の北半部にあたる。調査区の中央を東西に横切る私道を境に北側を「Ａ地区」、南側を「Ｂ地区」とした。ただし私道部分は既に撹乱を受けていたため調査から除外した。

平成10年度の調査区は対象範囲南半部にあたる「Ｃ地区」だが、当初３分割に調査した関係で東から順に「Ｃ－東区」「Ｃ－中央区」「Ｃ－西区」とし、その後拡張した部分を「Ｃ－拡張区」とした。

検出した遺構は国土座標に基づく方眼を組んで記録した。水準高は西宮市３級水準点を基準とし、数値は大阪湾平均海水準（Ｏ.Ｐ.）である。

２．報告遺構名

遺構の名称は調査段階では年度ごとに個別に付けていたが、整理・報告書作成段階で全て振り直した。遺構名の記号の頭には属性を示すアルファベット（ＳＡ：構、ＳＢ：掘立柱建物、ＳＤ：溝、ＳＥ：井戸、ＳＨ：竪穴住居、ＳＫ：土坑）を付し、続けて属性ごとに番号を振った。ただし調査時の遺構名との混乱を避けるため、報告時の遺構番号は001～の３桁とした。なお柱穴については基本的に振り直しを行わず、必要に応じて調査時の名称を用いて示した。

第１節　基本層序

北口町遺跡の調査前の現況は市街地で、現地表の標高は6.4～6.8mＯ.Ｐ.である。現地表下には全体に30～90cmの盛土がある。これは鉄道が開通した大正年間以降のものと考えられる。

盛土下の層位は近世～近代の水田土壌層、中世の洪水砂、黄褐色砂質シルト層となっており、この黄褐色砂質シルト層上面で弥生時代～中世の遺構を検出した。遺構検出面の標高は5.5mＯ.Ｐ.前後である。ただし中世の遺構の埋土が洪水砂を含んだ灰色土壌であるのに対し、弥生時代～古墳時代の遺構の埋土は土壌化の進んだ黒褐色シルト層で、その差は歴然としている。これは中世以前の地表には黒褐色土壌層が存在したことを示しており、おそらく中世の開発によって失われたものとみられる。

また中世の洪水砂は細かくみると３～４面に分けられ、この時期に洪水による被害が頻発したことが知られる。しかしその洪水砂も土壌化を受けており、居住地でなくなった後は水田もしくは畑地として利用されていたものと考えられる。

遺構検出面下の地層は、井戸ＳＥ003の断割り時に約2.6m下の深度まで観察した。土層はシルトと砂の互層となっており、旧地表面を示す土壌層が６面確認できた。遺物は全く出土しなかったが、弥生時代前期以前の沖積層を3.0mＯ.Ｐ.の深さまで確認したことになる。

第２節　弥生時代前期の調査

１．遺構

遺構はＣ地区南半部において検出した弥生時代前期の大型の溝３条である。また、溝の上面等においてピットを検出した。

溝ＳＤ001（図版５～７）

Ｃ－東区から中央区の南側に位置する。南西側から北東側に向かって流れている。断面形は検出面での最大幅182cm、底面の幅64cm、高さ98cmの逆台形状を呈する。調査区南端においてＳＤ002と交差するようであるが、調査区外での状況を想定するのは困難である。

遺物は甕（１）、鉢（２）、壷（３）が出土した。

溝ＳＤ002（図版５～７）

Ｃ－中央区から西区の南側、更に拡張区にまたがって位置し、南西側を中心として僅かに弧状をなす。溝の底面のレベル差は約20cmで、Ｃ-西区と拡張区の境界付近が最も高く、そこから両側に向かってそれぞれ傾斜している。断面形は検出面での最大幅304cm、底面の幅90cm、高さ102cmの逆台形状を呈し、テラス状の段を残す部分もある。調査区南端においてＳＤ001と交差しており、南西側で検出したＳＤ003とはほぼ並行する関係にある。

遺物は壺（４・５・17～22・25・26）、甕（７・23）の他、底部及び破片等（６・８～15・24）や、土製紡錘車（16）が出土した。

溝ＳＤ003（図版５～７）

Ｃ－西区の南端に位置する。断面形は検出面での最大幅250cm、底面の幅130cm、高さ104cmの逆台形状を呈している。調査区端での検出のため、流れの方向等の詳細は明確でないが、北東側で検出したＳＤ002とはほぼ並行する関係にあり、同様の状況を呈すると考えられる。

遺物は甕（30～32）、鉢（33～37）の他、底部及び破片（27～29）が出土している。

ＳＤ001上面ピット

ＳＤ001埋土上面でピットを数基検出したが、住居等に伴うものではない。遺物が出土しているものもあるが、ＳＤ001内遺物の混入も考えられる。ここでは便宜的にピットとしてあげた。

遺物はＰ178で甕の破片（38）、Ｐ266で底部（39）が出土した。

２．遺物

溝ＳＤ001（図版32－１～３）

甕（１）

口縁部は上端に平坦部を持つ「逆Ｌ字」状を呈する。胴上半部外面は横方向を主体とするハケメ、内面は板状のナデで、口縁部はヨコナデである。口径約34.8cm。

鉢（２）

僅かに上げ底の平底から、やや内彎気味に立ち上がる胴部を呈する無頸のものである。胴部内面は横及び斜め方向の条痕の後ナデで仕上げる。外面は磨滅のため不明である。口径約15.2cm、器高15.2cm、底径約8.6cm。

蓋（３）

平坦な天井部から、大きく緩状に広がる蓑笠状を呈する。体部には円孔を一箇所に施し、口縁部は欠損する。外面は板状のナデ、内面はナデで仕上げる。天井部径約6.3cm。

溝ＳＤ002（図版32－４～18、図版33－19～26）

壺（４～６）

４は上半部を図化した。屈曲の緩い窄まりの頸部から外反する口縁部を持つ。頸部外面には４条のヘラ描き沈線を施し、肩部には２条のヘラ描き沈線が残る。口径約12.2cm。

５は胴部中位に最大径を持ち、強く窄まる頸部から外反する口縁部を持つ。頸部外面には２条、胴部には２条のヘラ描き沈線を施す。胴部内面はナデ。頸部内面と底部付近外面には指頭圧痕が残る。口径8.2cm、底径5.9cm、胴径11.2cm、器高15.0cm。

６は胴部中位付近にあたる。外面には７条のヘラ描き沈線を施す。

甕（７～10）

７は中位から上半部を図化した。上位に最大径を持つ鉢状の胴部から僅かに外反する「く」の字状口縁部を持つ。口縁部下外面には４条のヘラ描き沈線を施す。口縁端部にはキザミを施す。胴部外面は縦方向のハケメ、内面をナデで調整する。口径約21.2cm、胴径20.0cm。

８は緩やかに外反する口縁部である。頸部外面には４条のヘラ描き沈線を施す。

９は強く屈曲する如意形の口縁部である。口縁部下外面には１条のヘラ描き沈線を施す。口縁端部にはキザミを施す。

10は短く外へ伸びる逆「Ｌ」字形に近い口縁部である。口縁部下外面には横方向に２条、斜方向に３条のヘラ描き沈線を施す。外面は縦方向のハケメ、口縁端部はヨコナデで調整する。

底部（11～15）

11は大型の壺であろう。外面は縦方向のハケメで仕上げ、部分的に煤が付着し、黒斑も残る。底径約11.4cm。

12は小振りの底部から大きく開く胴部を持つ大型の壺であろう。外内面はナデで仕上げ、内面に指頭圧痕が僅かに残る。底径9.1cm。

13は甕である。内面はナデで仕上げる。底径8.9cm。

14は大型の壺であろう。外内面はナデで仕上げる。底径8.3cm。

15は壺であろう。外面は縦方向、内面は横方向を主体とした板状工具によるナデで仕上げる。底径約8.0cm。

土製紡錘車（16）

断面形は中央にやや厚くなっている。直径4.8cm、厚さ1.4cm。

壺（17～22・25・26）

17は大型のもので、上位部を図化している。強く窄まる頸部から大きく外反する口縁部を持つ。頸

部から肩部の外面には、３条の断面三角形凸帯を、横方向及び縦方向と交互に貼付し、凸帯上には其々キザミを施す。外面は縦方向、内面の口縁部は横方向のヘラミガキで仕上げ、一部ハケメも残る。また、胴部内面はユビナデを主体とするナデで仕上げる。口径24.4cm。

18は下半部を図化している。胴部中位に最大径を持ち、外面には４条のヘラ描き沈線を施す。外面は図化不能ながらヘラミガキで仕上げ、内面はナデである。また、底部内面には指頭圧痕が残る。底径約7.6cm、腹径約22.6cm。

19は胴部中位に最大径を持ち、強く窄まる頸部から外反する口縁部を持つ。頸部外面には３条のヘラ描き沈線を施す。胴部中位には焼成後穿孔を対面する２箇所に穿つ。外面は縦方向のハケメの後ナデ、内面はナデで仕上げる。また、底部付近外面、胴部中位内面には指頭圧痕が残る。胴部の一部に黒斑が残る。口径12.2cm、底径6.0cm、腹径14.9cm、器高20.5cm。

20は19に近い形態で、口縁部はやや肥厚し、底部は僅かに上げ底である。頸部外面には５条のヘラ描き沈線を施す。胴部下位から頸部には焼成後穿孔を１箇所に穿つ。外面は縦方向のハケメの後ナデ、内面はナデで仕上げる。また、底部には指頭圧痕が残る。胴部に黒斑が残る。口径11.5cm、底径6.9cm、腹径15.4cm、器高21.1cm。

21は口縁部を欠損する。胴部中位に最大径を持ち、頸部で強く窄まる。頸部外面には５条、胴部中位には７条のヘラ描き沈線を施す。外面は不明瞭ながらミガキ、内面は板状工具によるナデで仕上げる。胴部に黒斑が残る。底径6.2cm、腹径15.4cm。

22は口縁部を欠損する。胴部中位に最大径を持ち、頸部で強く窄まる。頸部外面には４条のヘラ描き沈線、胴上半部には３条の断面三角形の貼り付け凸帯を施す。凸帯上にはキザミを施す。外面はハケメの後横方向のミガキ、内面は板状工具によるナデで仕上げる。底径6.1cm、腹径13.8cm。

25は、大型のもので、口縁部のみ図化する。頸部外面には２条のヘラ描き沈線が残る。外面はナデ、内面は横方向のミガキで仕上げる。口径約36.8cm。

26は口縁部を欠損する。胴部中位に最大径を持ち、頸部で強く窄まる。頸部外面には３条のヘラ描き沈線を施す。外面は斜方向のミガキ、内面は下半部をミガキ、上半部をナデで仕上げる。底径6.0cm、腹径12.4cm。

甕（23）

小型の鉢状を呈する。口縁部は短く外反する。内面は横方向のハケメで仕上げる。口径14.5cm、底径5.9cm、器高11.8cm。

底部（24）

大形の甕の底部であろう。底部中央には焼成後穿孔を施す。外面は不明瞭ながらミガキで、底部付近は板状工具による横方向のナデ、内面はナデで仕上げ、指頭圧痕が残る。底径9.8cm。

溝ＳＤ003（図版33－27～29、図版34－30～37）

壺（27）

壺の肩部にあたる。外面には３箇所のヘラ描き２条沈線の間に竹管文を施す。外内面は共にナデで仕上げる。生駒西麓産の胎土に近似する。

甕（28）

甕の口縁部付近にあたる。外面には２～３条の横方向ヘラ描き沈線２箇所の間に、４条の斜方向ヘラ

描き沈線を施す。調整は不明である。

底部（29）

壺の底部であろう。底部中央には焼成後穿孔を施す。外面はミガキに近いナデを施す。また、外内面には指頭圧痕が残る。底径7.9cm。

甕（30～32）

30は上半部を図化した。短く外反する如意形口縁部を持つ。口縁端部にはキザミを施す。口縁部下外面には3条のヘラ描き沈線を施す。外面は縦方向のハケメ、内面は縦方向のハケメの後ナデで仕上げる。口径23.1cm。

31は底部を欠損する。短く大きく外反する口縁部を持つ。口縁端部にはキザミを施す。口縁部下外面には幅広の3条のヘラ描き沈線を施す。外内面は共にナデで仕上げる。口径19.9cm。

32は鉢状を呈し、短く外反するL1縁部を持つ。口縁端部にはキザミを施す。口縁部下外面には3条のヘラ描き沈線を施す。外面は縦方向のハケメ、内面はナデで仕上げる。また、底部内面には炭化物が付着する。口径25.3cm、底径6.0cm、器高21.7cm。

鉢（33～37）

33は下位を欠損する。やや内弯しながら立ち上がる胴部に大きく外反する口縁部を持つ。L1縁端部にはキザミを施す。口縁部下外面には7条のヘラ描き沈線を施す。外面は縦方向及び斜方向のヘラミガキ、内面は板状工具によるナデで仕上げる。口径約23.8cm、腹径21.6cm。

34は下位を欠損する。大きく外反する口縁部を持つ。外内面には共に横方向を主体とする細かなヘラミガキを施す。口径約24.6cm。

35は大きく開く胴部から短く緩やかに外反する口縁部を持つ。口縁部下外面には4条のヘラ描き沈線を施す。外内面は共に横方向の後に縦方向のヘラミガキで仕上げる。口縁部外面には指頭圧痕が残る。L1径33.8cm、底径8.7cm、器高18.0cm。

36は下位を欠損する。やや内弯気味に立ち上がる胴部に短く外反する口縁部を持つ。L1縁部下外面には4条のヘラ描き沈線を施す。沈線下部にはヒレ状の把手を貼付するが、便宜上対面する2箇所と復元した。外内面は横方向を主体とするヘラミガキで仕上げる。口径約25.6cm。

37は下半部を欠損する。僅かに内弯する胴部に短く外反するL1縁部を持つ。口縁端部にはキザミを施す。口縁部下外面には4条のヘラ描き沈線を施す。外面は斜方向を主体とするハケメ、内面はナデで仕上げる。口径約47.3cm。

ＳＤ001上面ピット（図版34－38・39）

甕（38）

甕の口縁部付近にあたる。口縁部下外面には3条のヘラ描き沈線を施す。外内面は共にナデで仕上げる。

底部（39）

壺の底部であろう。外面はナデとみられる。底部外面には指頭圧痕が残る。底径約9.3cm。

石器（図版41－S１～S13、図版42－S14～S17）

石鏃（S１～S５）　サヌカイト製の無茎式の石鏃である。このうち、S１～S３の３点は小型の石鏃に分類される。S１は平面形は均整を欠くが、正三角形に近い平基式石鏃である。先端部を欠損するが、切先角は50°前後か。残存長14.2mm、幅16.0mm、重さは0.7g、サヌカイトでSD003出土。S２はSD018出土の凹基式石鏃である。作用部側縁は直線的に調整され、凹基の抉りは浅い。長さ19.2mm、幅12.8mm、重さは0.5g、金山産サヌカイトである。S３は平基式石鏃であるが、基部両端部はやや丸く収められる。重さは0.5g、金山産サヌカイトでSD025出土である。S４はSD002出土の凹基式石鏃である。作用部側縁は緩やかに外弯するように調整される。先端部を欠損するが、残存長9.4mm、幅19.7mm、重さは2.2g、金山産サヌカイトである。S５は作用部側縁の調整と二次調整が比較的丁寧に施された、サヌカイトの凹基式石鏃である。残存長23.7mm、幅19.2mm、重さは1.3gである。

石錐（S６）　サヌカイトの石錐である。断面が長方形の縦長剥片に剥離調整を加え、断面菱形の作用部を整形する。基部は一隅を除いて調整は行われてはおらず、また肉眼観察による限り、摩耗痕は認められない。長さ60.8mm、重さは10.5g。

石斧（S７）　剥片のポジティブな面の下端に刃部を半坦に研磨し、そして自然面を多く残す裏面に鏨を削り出した、片刃の斧もしくは鑿である。サヌカイト製で、長さ58.2mm、幅27.3mm、重さ24.3g、SD001から出土した。

楔形石器（S８・S９）　サヌカイトの楔形石器である。S８は片傷の側縁に粗い二次調整を施しており、長さ35.8mm、幅26.6mm、SD003から出土した。S９は扁縁に二次調整を施しており、図示した下辺は潰れの程度が顕著である。長さ36.0mm、幅30.8mmである。

磨製石包丁（S10・S11）　いずれもSD003から出土した磨製石包丁である。S10は刃部が緩やかに弧をなし、背部はほぼ直線的となる外弯刃半月形石包丁である。刃部の鏑は片面に顕著に認められ、この部位で厚さが最大となる。紐孔は背部寄りに穿たれており、石材は粘板岩である。S11は緑色片岩の直線刃半月形石包丁である。紐孔は刃部と背部のほぼ中央に、21.3mmの距離で２孔設けられている。刃部の鏑は甘いが、両刃を志向していることが窺える。また、片面には径15mm前後の痘痕状の敲打痕が確認できる。現存幅は37.8mmである。

磨石（S12）　球形に近い磨石である。全面がなめらかで、部分的に光沢をもつが、顕著な使用痕とは認められない。花崗岩で、重さは220gである。

砥石・敲石（S13～S17）　S13は凝灰質砂岩の砥石である。砥面は平滑で不定方向の擦痕が認められる。この砥面は被火のため黒変しており、鋳型の可能性もなくはない。長さ56.5mm、幅47.5mm、重さは95.5gでSD002から出土している。S14は４側面に砥面をもつ。部分的に被火のため黒変している。重さは615gである。S15は４側面に砥面をもつ。一部に直線的で鋭利な条痕が認められる。白色の堅緻な砂岩製である。S16は表裏２面に使用痕が認められる。展開図左の面は平坦面が少なく、上方に痘痕状の敲打痕が認められる。さらに下方には、幅15mm前後の斜め方向にはしる浅い凹部がある。この裏面は平坦部が多く、直線的な擦痕が不定方向に存在している。台石や砥石として多様に使用されたのであろう。古墳時代の土坑SK009から出土した。S17は、砂岩製の敲石である。下端部には、径15mm程度の敲打痕が認められる。また、側面上方の位置には痘痕状の剥離が集中しており、間接打撃に際して使用されるハンマーとしての用途も想定しうる。片面には黒変部が認められ、被火したものと考えられる。長さ113mm、重さは390gで包含層より出土したものである。

第３節　弥生時代後期～古墳時代前期の調査

１．遺構

見つかった遺構には竪穴住居６軒と掘立柱建物５棟・土坑７基・集落の西を限る溝・その他の溝などがある。遺構は調査区のほぼ全域に認められた。

竪穴住居ＳＨ001・溝ＳＤ004（図版11）

Ｂ地区とＣ－東区の境界に位置するが、北半部は残存状況が悪い。プランは円形で、直径はおよそ8.3mに復原できる。柱穴は３箇所検出したが、配置から見て本来は５本柱であったと考えられる。壁際には周壁溝をめぐらす。中央土坑付近は中世以前の撹乱によって失われている。

ＳＨ001の外周約３mのところを弧状の溝ＳＤ004が住居を囲むようにめぐっている。復原径は14～15mだが、北半部は失われていて不明である。ＳＤ004の南辺に東西方向の溝ＳＤ005が接している。溝の大きさは幅30cm、深さ10cm程度である。

ＳＨ001からの出土遺物には壺（40）、甕（41～44・52）、高杯（45）がある。

ＳＤ004からの出土遺物には壺（105）がある。

竪穴住居ＳＨ002（図版12）

Ｃ－西区の北側に位置する。プランは長方形で、規模は4.8m×3.6mである。柱穴は中央土坑をはさんだ長軸側に２本ある。中央土坑は楕円形で、70cm×55cm、深さ８cm程度の浅いものである。壁際には周壁溝をめぐらす。

遺物は細片のみで、図化できたものはない。

竪穴住居ＳＨ003（図版13）

Ｂ地区の東側に位置し、北辺と南東隅は調査区外である。ＳＨ004に切られているが、床面のレベルがほぼ同一であったため、形状はあまり損なわれていない。プランは正方形で、規模は一辺5.7mである。床面の外周は中央に対して一段高く作られており数cmの段差があったが、高床部は削平されていて本来の比高差は不明である。柱穴は４本で、低床部の四隅に配置されている。中央土坑は円形で、直径60cm、深さ12cmである。壁際には周壁溝をめぐらす。

住居からの出土遺物には弥生土器の脚付壺（46）、甕（47）があるが、ＳＨ004出土遺物との峻別ができておらず、どちらに属するものか不明である。

竪穴住居ＳＨ004（図版13）

Ｂ地区の東側に位置し、ＳＨ003を切っている。南東側の一部は調査区外である。プランは正方形に近く、規模は4.9m×4.6mである。壁際には周壁溝をめぐらす。検出した範囲内では、炉の痕跡は認められなかった。

竪穴住居ＳＨ005（図版14）

Ｃ－東区の北側に位置する。東半部は調査区外の上、南辺が撹乱で失われており、西半部の一部が

検出できたのみである。プランは方形で、2本の柱穴を検出しており、本来は4本柱であったとみられる。

遺物は細片のみで、図化できたものはない。

竪穴住居ＳＨ006（図版14）

Ｃ－中央区の北側に位置する。北西隅は調査区外である。プランはほぼ正方形で、一辺は4.2～4.3mである。柱穴は4本で、壁際に周壁溝をめぐらす。

図化できた遺物には弥生土器の壺（49）、甕（50）がある。

竪穴住居ＳＨ007（図版15）

Ｃ－中央区の南側に位置する。南隅は調査区外である。プランはほぼ正方形で、一辺は6.2～6.3mである。柱穴は4本で、壁際に周壁溝をめぐらす。南東辺の壁際中央に土坑を設けている。

土坑は周壁溝の内側に掘り込まれている。平面は不整な瓢箪形を呈し、長径1.1m、短辺0.35～0.45m、深さ15cmである。埋土の上層に炭を含み、炭層の上面に土器が据えられていた。土坑の内側から向かって左側にはミニチュアの鉢が、右側には甕の底部が遺存していた。

図化できた遺物には弥生土器の鉢（48）がある。

掘立柱建物ＳＢ001（図版16）

Ａ地区中央の南端に位置し、南半部は調査区外である。建物北端の柱列2間分しか検出できなかったが、他の例から見て2間×2間の建物となる可能性が高い。

東西方向の柱間は1.6～1.8mで、東西の柱列の方位はＮ75°Ｗである。建物の規模は不明である。

出土遺物に図化できるものはなかった。

掘立柱建物ＳＢ002（図版17）

Ｂ地区の中央に位置する。東西2間×南北2間の側柱建物だが、東辺中央の柱は検出できなかった。

柱間は1.5～1.7mで、建物はほぼ正方形を呈する。規模は東西3.3m、南北3.4m、床面積約11m²で、東西の柱列の方位はおよそＮ70°Ｗである。

出土遺物に図化できるものはなかった。

掘立柱建物ＳＢ003（図版17）

Ｂ地区の西側に位置する。東西2間×南北2間の総柱建物である。

東西方向の柱間は1.6～1.8m、南北方向の柱間は1.7～1.9mで、わずかに南北方向に長い長方形を呈する。規模は東西3.4m、南北3.8m、床面積約13m²で、東西の柱列の方位はおよそＮ70°Ｗである。

出土遺物に図化できるものはなかった。

掘立柱建物ＳＢ004（図版18）

Ｃ－東区の北側に位置する。東西2間×南北2間の総柱建物である。

柱間は1.3～1.5mで、ほぼ正方形を呈する。規模は東西2.8m、南北2.9m、床面積約8m²で、東西の柱

列の方位はおよそN67°Wである。

出土遺物に図化できるものはなかった。

掘立柱建物ＳＢ005（図版18）

Ｃ－中央区に位置する。東西２間×南北２間の総柱建物だが、南辺中央の柱は検出できなかった。

東西方向の柱間は1.3～1.5m、南北方向の柱間は1.6～1.8mで、南北方向に長い長方形を呈する。規模は東西2.9m、南北3.5m、床面積約10m²で、東西の柱列の方位はおよそN65°Eである。

出土遺物に図化できるものはなかった。

土坑ＳＫ001（図版19）

Ｂ地区の西端に位置する。上面の形は楕円形だが、底面は円形である。掘り方の角度は約70°で、底面は平らに掘り込む。大きさは1.9m×1.5m、深さ1.45mである。下層のシルト層から弥生時代終末期の土器が多量に出土した。また最下層の暗灰色シルト層からは果実の種子も出土した。

図化した遺物には壺（73・80）、口縁部（74）、ミニチュア土器（75）、甕（81）がある。

土坑ＳＫ002（図版19）

Ｂ地区の東端に位置し、ＳＨ004の南に接する。平面は長円形で、東端は側溝に切られている。残存する大きさは1.5m×0.75m、深さ25cmである。下層のシルト層から弥生時代終末期の土器が多量に出土した。また最下層の暗灰色シルト層からは果実の種子も出土した。

図化した遺物には壺（54）、甕（55）、脚部（56）がある。

土坑ＳＫ003（図版19）

Ｃ－西区の北側に位置し、ＳＨ002の北に近接する。上面の形は不整な隅丸長方形だが、底面はややシャープな長方形となる。掘り方の上半は60°前後の角度だが、下半は垂直に近くなる。大きさは1.5m×1.0m、深さ0.75mである。埋土の上層から古墳時代前期の土器が多量に出土した。また土器に混じって10～15cm大の亜角礫も数点出土した。

図化した遺物には甕（67）、高杯（68）、イイダコ壺（69・70）がある。

土坑ＳＫ004（図版19）

Ｃ－西区の北側に位置し、ＳＫ003とＳＫ005に両端を切られているため、形態は不明である。掘り方は浅い皿状で、幅0.65m、深さ20cmである。埋土には土器・炭が含まれている。

図化した遺物には甕（71）、ミニチュア壺（72）がある。

土坑ＳＫ005（図版19）

Ｃ－西区の北側に位置し、ＳＨ002の北に接する。平面は卵形で、底面は平らである。大きさは0.85m×0.7m、深さ20cmである。埋土には土器・炭が含まれている。

図化した遺物には甕（77・78）がある。

土坑ＳＫ006（図版19）

Ｃ－西区の北側に位置し、ＳＨ002の埋土・床面を切っている。上面の形は楕円形だが、底面はほぼ正円形となる。掘り方の上半は60°前後の角度だが、下半は垂直に近くなる。大きさは1.15m×0.9m、深さ1.0mである。埋土の上層に古墳時代前期の完形壺を含む土器群が一括に投棄されていた。土器に混じって10～15cm大の亜角礫も数点出土した。

土坑の掘り方・埋土・遺物の出土状況などは、ＳＫ003と共通した様相を呈している。

図化した遺物には壺（57～62）、甕（63）、高杯（64～66）がある。

土坑ＳＫ007（図版19）

Ｃ－西区に位置する。平面は不整な長円形で、掘り方は浅い皿状を呈する。大きさは1.2m×0.85m、深さ18cmである。埋土には土器・炭が含まれている。

出土遺物に図化できるものはなかった。

溝ＳＤ006（図版19）

Ａ地区の西側から、Ｂ地区の西北隅をかすめ、Ｃ－西区からＣ－拡張区まで直線的に延びている。溝の方向はおよそＮ10°Ｅで、微高地から谷地形に移行する変換点に掘り込まれている。ＳＤ006は集落の西端を画しており、溝を境に西側では水田土壌層が顕著となる。

溝の幅はＡ地区付近では狭く、幅0.7m、深さ30cmほどだが、Ｃ地区では幅3.0～3.5m、深さ40～50cmに広がり、数度の掘り直しも認められる。埋土の上層には多量の土器が投棄されていた。

図化した遺物には壺（83・84・89・92・93・95～97）、甕（85～87・90・94・98）、器台（88・102）、高杯（91）、鉢（99・100）、台部（101）、ミニチュア土器（103）および弥生時代前期の蓋（104）がある。

溝ＳＤ008～ＳＤ016（図版19）

Ｃ地区では北西－南東方向に平行する数条の溝列を検出した。これらの溝列の配置は大きく２箇所に分かれている。

ＳＤ008～ＳＤ011はＣ－東区の北側に位置し、ＳＨ001・ＳＨ005・ＳＤ004などを切って、中世のピットに切られている。この４本の溝は2.5～3.0mの間隔をおいて平行しており、方位はおよそＮ50°Ｗである。溝の大きさは幅25～40cm、深さ10～15cmである。このうちＳＤ010は延長11m分を検出しているが、溝の両端ではっきりしたレベル差は認められない。

ＳＤ012～ＳＤ016はＣ－中央・西区の南側に位置し、中世の溝に切られている。この５本の溝は2.0～3.0mの間隔をおいて平行しており、方位はおよそＮ30～40°Ｗである。溝の大きさは幅20～30cm、深さ３～９cmである。このうちＳＤ012は延長18m分を検出しており、溝の両端で３cmほどの比高差があるとはいうものの、はっきり傾斜をもつと言うほどのレベル差はない。それよりもＳＤ012からＳＤ016に向かって、徐々に低くなる傾向が認められる。

上記２箇所の溝列はいずれも幅20～40cm、深さ３～15cmほどの溝が間隔をおいて平行するもので、方位も似かよっているところから、両者は一連の遺構と考えられる。出土遺物に年代を示す手掛かりがなく所属時期は不明確だが、須恵器がない点と切り合い関係からこの節に含めた。

２．遺物

竪穴住居ＳＨ001（図版35－40～45・52）

壺（40）

口縁部のみの図化である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は僅かに肥厚して面をなし、端面上に竹管状の刺突文を施す。外内面は共にナデで仕上げる。口径約13.1cm。

甕（41・42）

41は口縁部のみの図化である。口縁部は「く」の字状を呈し、端部を上方につまみ上げる。端面にはナデによる１条の沈線を施す。外面はヨコナデ、内面には横方向のハケメが残る。口径約17.0cm。

42は胴部上位から頸部を図化している。外面は横方向の細かな平行タタキで、内面はナデで仕上げる。庄内系の甕と考える。

底部（43・44）

43は甕である。外面はタタキ、内面には板状工具痕が残る。底径約4.6cm。

44は小振りの底部を持つ甕である。外面は斜方向及び横方向のタタキ、内面はハケメの後ナデで仕上げる。底部には籐状の繊維質が残る。底径3.5cm。

脚部（45）

高杯であろうか。外面は縦方向のハケメ、内面に横方向のナデで仕上げる。

底部（52）

甕である。外面は横方向のタタキで仕上げる。ＳＨ001内の柱穴Ｐ88から出土した。

竪穴住居ＳＨ003・004（図版35－46・47）

脚付壺（46）

短い柱状部から大きく広がる裾部を持つ脚部に、胴部最大径を中位に持つ小型丸底壺を取り付けるものである。脚裾部には４～５箇所の円孔を施す。また、脚端部及び口縁端部には沈線を有す。外面は横方向のヘラミガキ及びナデで仕上げる。口径10.4cm、壺胴部径13.5cm、器高20.4cm、脚部径21.8cm。

甕（47）

口縁部のみを図化した。稜の緩い「く」の字状から短く外反する口縁部を持つ。胴部外面は斜方向のタタキ、内面はケズリで仕上げる。口縁部はヨコナデである。口径約14.0cm。

竪穴住居ＳＨ007（図版35－48）

鉢（48）

稜の緩い屈曲から短く開く口縁部を持つ。体部外面には手捏ね成形による指頭圧痕が残り、内面には横方向のケズリが一部残る。口径約7.0cm。

竪穴住居ＳＨ006（図版35－49・50）

底部（49・50）

49は壺であろう。やや上げ底の平底から大きく開く体部を持つ。外面は縦方向のハケメで、底部付近には指頭圧痕が残る。底径4.8cm。

50は甕である。外面は横方向のタタキで仕上げ、内面には板状の工具痕が残る。底径約4.9cm。

ピット（図版35－51・53）

甕（51）

P247から出土した。中位から上半部を図化した。中位に最大径を持つ球形の胴部から短く開く「く」の字状の口縁部を持つ。胴部外面は右上がり斜方向のタタキ、内面はイタナデで仕上げる。口径約11.5cm、腹径約13.0cm。

脚部（53）

P74から出土した。裾端部のみ図化したが、高杯の脚部であろう。外面には3条の凹線文が巡り、円孔の痕跡が一部に見える。外面はイタナデ、内面はハケメが残る。脚部径約19.9cm。

土坑ＳＫ002（図版35－54～56）

壺（54）

口縁部のみを図化した。短く直行する頸部から、屈曲して大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は下方に肥厚して面を成し、上下2段の並列の刺突列点文を施す。頸部の屈曲部外面には1段の刺突列点文を施す。内面には指頭圧痕が残る。口径約16.0cm。

甕（55）

口縁部のみを図化した。強く屈曲する「く」の字状の口縁部を持つ。口縁端部は上方へ僅かにつまみ出す。胴部外面は右上がりの斜方向タタキ、内面はハケメで仕上げる。口縁部はヨコナデである。口径約15.8cm。

脚部（56）

高杯である。やや円錐状を呈する柱状部から大きく開く裾部を持つ。裾部には4箇所の円孔を施す。外面はミガキ、裾部内面は丁寧なヨコナデである。脚部径16.6cm。

土坑ＳＫ006（図版35－57～61、図版36－62～66）

壺（57～61）

57は口縁部のみを図化した。内傾気味に窄まる頸部から短く大きく外反する口縁部である。口縁端部は僅かに肥厚して面をなす。頸部付近外面は縦横に細かなヘラミガキを施す。また、口縁部はヨコナデで仕上げる。口径約13.8cm。

58は大型のものである。小振りの平底で最大径を中位に持つ下膨れの胴部を呈し、直行する短い頸部から屈曲して大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は肥厚して面をなし、端面上に1条の沈線を施す。胴部外面は縦方向を主体とするヘラミガキ、内面は横及び斜方向のハケメで仕上げる。また、底部付近内面はイタナデで調整する。口径20.0cm、底径6.4cm、腹径40.4cm、器高36.2cm。

59は口縁部のみを図化した。稜の緩い屈曲から僅かに外反する「く」の字状を呈する。口縁端部はやや肥厚して面をなし、端面に1条の沈線を施す。胴部外面はハケメ、内面はナデである。口径約15.2cm。

60は口縁部のみを図化した。緩い屈曲からやや開き気味に直行する口縁部を持つ。口縁部はヨコナデで仕上げる。口径約12.5cm。

61は胴上半部を図化した。最大径を中位に持つ胴部に、直行する短い頸部から屈曲して大きく開く口縁部を持つ。外面は斜方向を主体とするヘラミガキで仕上げる。口径約19.6cm、腹径約29.0cm。

底部（62）

壺である。小振りの平底から大きく開く胴部を持つ。外面はイタナデ、内面は縦横のハケメで仕上げる。底径3.9cm。

甕（63）

底部を欠損している。最大径を中位に持つ卵形の胴部に、緩い屈曲から短く外反する「く」の字状の口縁部を持つ。胴部外面上半は横方向、下半は右上がりの斜方向のタタキ、内面はイタナデで仕上げる。口径約14.1cm、胴部径約14.5cm。

脚部（64・65）

64は裾部を欠損するが高杯である。円錐状を呈する柱状部から緩やかに開く。裾部には円孔の痕跡が残る。外面は縦方向のミガキ、内面はハケメで仕上げる。

65も裾部を欠損するが高杯である。やや円錐状を呈する柱状部から大きく開く。裾部には約6箇所の円孔を施す。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はハケメで、板状の工具痕が残る。

高杯（66）

杯部の口縁部のみを図化した。大きく開く体部から、僅かに屈曲して大きく外反しながら開く口縁部を持つ。外面は縦方向、内面は縦横方向の細かなヘラミガキを施す。口径約27.0cm。

土坑ＳＫ003（図版36－67～70）

甕（67）

胴部上位から口縁部のみを図化した。胴部上位に張りを持ち、緩い屈曲の「く」の字状口縁部を持つ。口縁端部はやや内側へつまみ出す。外面は縦の後に横方向を主体とするハケメとイタナデ、内面は横方向のケズリで仕上げる。口径約11.5cm。

脚部（68）

裾部を欠損するが高杯である。円錐状を呈する若干中実の柱状部から大きく開く。裾部には3箇所の円孔を施す。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のイタナデで仕上げる。

イイダコ壺（69・70）

69はやや尖り気味の丸底から、若干内弯しながら立ち上がる卵形を呈する。口縁部には1箇所の円孔を施す。外内面は共にユビナデで、指頭圧痕が残る。口径約5.1cm、器高6.7cm。

70はやや偏平気味の丸底から、若干開きながら立ち上がる筒形を呈する。口縁部には1箇所の円孔を施す。外内面は共にユビナデで、指頭圧痕が残る。口径約6.1cm、器高9.4cm。

土坑ＳＫ004（図版36－71・72）

甕（71）

胴部上位から口縁部のみを図化した。緩の緩い屈曲の「く」の字状口縁部を持つ。口縁端部はやや内側へつまみ出す。外内面は共に調整不明で、口縁部はヨコナデである。口径約14.6cm。

底部（72）

ミニチュアの壺形であろう。僅かに上げ底の平底に球体の胴部を持つ。外面はユビナデで、底部付近には指頭圧痕が残る。また、内面はイタナデであろう。底径約4.2cm。

土坑ＳＫ001（図版36－73～75・80・81）

壺（73・80）

73は胴部下位を欠損する。最大径を中位に持つ球形の胴部に、稜の緩い屈曲からやや外反しながら立ち上がる「く」の字状口縁部を持つ。胴部外面は右上がりのタタキの後にヘラミガキ、内面は縦方向のイタナデで、頸部内面には指頭圧痕が残る。口径約13.2cm、腹径約24.7cm。

80は口縁部のみを図化した。稜の緩い屈曲の「く」の字状口縁部を持つ。口縁端部はやや上方へつまみ出す。外内面は共にナデで、内面には指頭圧痕が残る。口径約12.0cm。

口縁部（74）

壺若しくは器台の口縁部であろう。外面には内区に格子目を持つヘラ描きの鋸歯文を施す。

ミニチュア土器（75）

口縁部が欠損するが壺であろう。平底から緩やかに立ち上がり、口縁部にかけて僅かに外反する。外内面は共に縦方向のイタナデで仕上げる。底径2.9cm。

甕（81）

小振りの半底から中位に最大径を持つ球形の胴部が取り付き、稜の緩い屈曲の「く」の字状から短く外反する口縁部を持つ。胴部外面は右上がりのタタキを主体とするが、上位・中位・下位と調整が分割され、胴部成形段階による差異が見受けられる。また、胴部内面は斜方向のハケメの後にナデで仕上げる。口径16.0cm、胴径約21.8cm、底径4.3cm、器高22.3cm。

土坑ＳＫ019（図版36－76）

台部（76）

中世の遺構に混入した古墳時代の土器である。円錐状の形態を呈し、裾部で若干開く。台部中位には円孔を施す。外内面は共にナデで仕上げる。脚部径9.2cm。

土坑ＳＫ005（図版36－77・78）

甕（77・78）

77は口縁部のみを図化した。稜の強い屈曲の「く」の字状を呈する。口縁端部は内側へつまみ出す。胴部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のケズリで仕上げ、口縁部はヨコナデである。口径約13.9cm。

78は上半部を図化した。最大径を中位に持つ球形の胴部に、稜の緩い屈曲の「く」の字状の口縁部を持つ。口縁端部は僅かに内側へつまみ出す。胴部外面は左上がりのタタキの後にハケメで、肩部にカキメ状の細かなヨコハケを施す。内面はケズリである。口径約14.4cm、胴径約18.4cm。

土坑ＳＫ011（図版36－79）

壺（79）

底部は丸底で、最大径を中位に持つやや潰れた球形の胴部を呈し、大きく開く口縁部を持つ。外内面は共にナデで、胴部内面にはハケメも残る。口径約11.0cm、胴径約14.0cm、器高15.6cm。

溝ＳＤ007（図版36－82）

脚部（82）

裾部のみの図化だが、高杯である。円錐状の柱状部から大きく開くもので、裾部中位には４箇所の円孔を施す。端部付近外面には３条の凹線文を施す。調整は不明。脚部径約17.4cm。

溝ＳＤ006（図版36－83～88、図版37－89～104）

壺（83・84・89・92・93・95・96）

83は口縁部のみを図化した。「ハ」の字状に大きく開く。外面は縦、内面は斜方向を主体とするハケメで仕上げる。口径約17.9cm。

84も口縁部のみを図化した。短く直口する筒状の頸部から屈曲してやや外反しながら大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は上下に大きく拡張して面をなし、鴨面上には６条１単位２段の櫛描き波状文を施した後、24箇所の竹管形円形浮文を貼付する。口縁部内面には櫛描き波状文及び直線文を施す。頸部外内面には横方向のヘラミガキを施し、指頭圧痕が残る。口径約21.2cm。

89は口縁部を欠損する。小振りの平底から、最大径を中位に持つ球形の胴部を持つ。胴部外面は横方向のタタキの後に縦方向を主体とするヘラミガキで仕上げる。内面は上半部を横、下半部を縦方向のハケメで仕上げる。胴径約25.0cm、底径4.9cm。

92は胴部上位のみを図化した。強く窄まる頸部からやや外反しながら大きく開く口縁部を持つ。外内面はナデを主体として仕上げる。内面には指頭圧痕が残る。口径約18.4cm。

93は口縁端部を欠損する。小振りの平底から、最大径を中位に持つ球形の胴部を持つ。胴部外面は右上がりの斜方向のタタキ、内面は斜方向を主体とするケズリで仕上げ、指頭圧痕が残る。胴径24.4cm、底径5.8cm。

95は底部を欠損する。最大径を中位に持つ球形の胴部に、緩い屈曲から短く開く「く」の字状の口縁部を持つ。胴部外面は下半部で斜方向のヘラミガキ、内面は横方向のケズリで仕上げる。口径約17.0cm、胴径約26.6cm。

96は口縁部のみを図化した。強く窄まる頸部から大きく外反する口縁部を持つ。口縁部付近はヨコナデである。口径約13.2cm。

底部（85～87）

85は甕の形態を呈するが、底部に焼成前穿孔を有し、甑の可能性がある。外面は横方向のタタキ、内面はハケメ及びイタナデで仕上げる。底径4.8cm。

86は甕であろう。外面は縦横のタタキで、内面は板状工具による工具痕が残る。底径3.4cm。

87も甕であろう。外面は縦横のタタキで、内面は板状工具による工具痕が残る。底径2.9cm。

小型器台（88）

裾部を欠損する。中実の体部から大きく開く受部を持つ。体部から裾部の境目には３箇所の円孔を施す。外面はユビオサエの後に横方向のヘラミガキで仕上げる。受部内面もミガキのようである。受部径10.3cm。

甕（90・94・98）

90は下位を欠損する。最大径を中位に持つ球形の胴部に、強い屈曲から短く開く「く」の字状の口縁部を持つ。胴部外面は横方向のタタキ、内面は縦及び斜方向のケズリで仕上げる。口径約15.4cm、

胴径約18.6cm。

94はやや尖底気味の丸底で、最大径を上位に持つ卵倒形の胴部を呈し、屈曲が緩くやや外反する「く」の字状のLI縁部を持つ。胴部外面は中位以上でタタキが残り、底部付近で縦方向の強いナデを施す。内面は縦方向のケズリである。口径13.0cm、胴径16.3cm、器高18.2cm。

98は口縁部のみを図化した。やや強い稜を持つ「く」の字状のLI縁部を持つ。口縁端部は内側へややつまみ出す。口縁部はヨコナデで、胴部内面には横方向のケズリが残る。LI径17.3cm。

高杯（91）

杯部を欠損する。屈曲する杯部には、中実で棒状の柱状部から大きく開く裾部を持つ。裾部には3箇所の円孔を施す。外面は柱状部で縦、裾部で斜方向を主体とするヘラミガキを施す。杯部内面には横方向のハケメが見える。脚部径13.6cm。

底部（97）

小型の壺であろう。やや凹みを持つ平底で、球形の胴部を持つ。胴径9.4cm、底径3.2cm。

鉢（99・100）

99は浅い椀状の体部で、緩い屈曲から外側へ大きく開くLI縁部を持つ。口縁端部は外側へ僅かにつまみ出す。体部外面は縦方向の細かなハケメ、内面はナデで、口縁部はヨコナデである。口径15.7cm、器高8.7cm。

100は口縁部を欠損する。浅い椀状の体部である。体部外面はハケメの後にナデで、底部付近はイタナデである。内面はナデである。

台部（101）

台付きの鉢あるいは壺となろうか。短く大きく開いた台部に、大きく開く体部が取りつく。台部には4箇所の円孔を施す。外内面は共にイタナデを主体として仕上げる。台部径7.5cm。

小型器台（102）

受部と据部を欠損する。中実の体部から受部と裾部にかけて大きく開く鼓形を呈する。受部内面にはヘラ状工具による放射状の圧痕が残る。

ミニチュア土器（103）

手捏ね成形の鉢状を呈する。体部外内面は共にユビナデで、指頭圧痕が無数に残る。LI径6.4cm、器高4.1cm。

蓋（104）

ＳＤ006内に混入した弥生時代前期の蓋である。笠状に開くもので、頂部には円孔を施す。器面の調整はナデであろう。口径9.5cm、器高2.1cm。

溝ＳＤ004（図版37－105）

壺（105）

胴部下位を欠損する。最大径を中位に持つ球形の胴部で、明瞭な稜線の屈曲を持つ「く」の字状のLI縁部を持つ。胴部外面は横及び縦方向のタタキ、内面はイタナデで仕上げ、指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデである。口径約13.6cm、胴径約21.9cm。

第４節　古墳時代中期～後期の調査

１．遺構

見つかった遺構には掘立柱建物１棟と柵列３箇所、土坑５基などがある。掘立柱建物・柵列の柱穴からの出土遺物はごく僅かで時期を決定する手がかりに乏しいが、辛うじて柵列ＳＡ003の柱穴Ｐ321から須恵器杯身（106）が出土している。そこでＳＡ003と方向の合う柵列・建物、および切り合い関係などで所属時期を判断した。

掘立柱建物ＳＢ006（図版16）

Ａ地区中央に位置し、ＳＡ001の南に接している。柱穴の残存状況はよくないが、東西２間×南北３間の総柱建物とみられる。

柱間は東西方向が2.4～2.6m、南北方向が1.5～1.8mで、棟は東西方向とみられる。梁方向の方位はＮ63°Ｗである。建物の規模は東西5.0m、南北4.6m、床面積約23m²である。

図化した遺物にはＰ29から出土した土師（107）がある。

柵列ＳＡ001（図版22）

Ａ地区の中央に位置し、掘立柱建物ＳＢ006の北側に面している。７本の柱穴の並びが認められ、延長９m分を検出した。柱の間隔は0.8～2.0mと不規則で、柱穴の掘り方は円形で直径は30cm前後のものが多い。方位はおよそＮ60°Ｗである。

出土遺物に図化できるものはなかった。

柵列ＳＡ002（図版22）

Ａ地区の西端に位置し、ＳＤ006を切っている。５本の柱穴の並びが認められ、延長８m分を検出した。柱の間隔は2.0mと一定しており、柱穴の掘り方は円形で直径は10～40cmのものがある。方位はおよそＮ15°Ｅである。

出土遺物に図化できるものはなかった。

柵列ＳＡ003（図版22）

Ｃ地区の西北隅から東壁に向かって調査区を横断している。切り合い関係としては、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を切り、中世の遺構には切られている。調査区内で19本の柱穴の並びが認められ、延長36m分を検出した。柱の間隔は2.0mと一定しており、柱穴の掘り方は円形で直径40cm前後のものが多い。方位はおよそＮ60°Ｅである。

図化した遺物にはＰ321から出土した須恵器杯身（106）がある。

土坑ＳＫ008（図版23）

Ｂ地区中央の南側に位置する。上面の形は楕円形だが、底面はほぼ円形となる。掘り方は70°以上の角度で掘り込まれているが、底面は皿状となる。大きさは1.1m×0.9m、深さ40cmである。

図化した遺物には土師器壺（108）がある。

土坑ＳＫ009（図版23）

Ｂ地区中央で、ＳＫ008の西側に位置する。平面は不整楕円形を呈する。底面は凹凸のある皿状となる。大きさは2.0m×1.6m、深さ25cmである。

図化した遺物には須恵器杯身（110）・壺（111）がある。

土坑ＳＫ010（図版23）

Ｃ－東区の北端で、ＳＫ009の南側に位置する。中世の土坑に切られているため形状ははっきりしないが、1.8m×1.2m、深さ10cm以上の大きさがある。

図化した遺物には須恵器杯身（109）がある。

土坑ＳＫ011（図版23）

Ｃ－東区の東端に位置し、土坑の東端は調溝にかかっている。平面は円形で、底面は平らである。大きさは径0.9m、深さ20cmである。

図化した遺物には土師器壺（79）がある。

土坑ＳＫ012（図版23）

Ｃ－東区の中央に位置する。周辺は溜まり状の窪地となっていてシルト層が堆積しており、ＳＫ012はその中に掘り込まれている。平面は不整な円形で、ボウル状の掘り方となっている。深いため西側にステップ状の段が設けられている。下層に炭が層状に入る黒色シルト層が堆積しており、底面に接して須恵器・土師器が多量に出土した。大きさは径1.5m、深さ0.7mである。

図化した遺物には土師器ミニチュア土器（112）・高杯（113～115）・埦（116）、須恵器壺（117）・甕（118）がある。

2．遺物

構ＳＡ003（図版38－106）

須恵器杯身（106）

欠列中のＰ321から出土した。立ち上がりは内弯してほぼ上方に伸び、端部は水平でわずかにくぼむ。復原される口径は11.3cmである。

掘立柱建物ＳＢ004（図版38－107）

土師質土錘（107）

円筒形の土錘の破片で、残存長3.6cm、径2.0cmである。焼成は不良で、極細砂を含む。

土坑ＳＫ008（図版38－108）

土師器壺（108）

小型の壺である。口頸部は直線的に開き、体部はやや肩が張り、底部は丸い。摩滅と剥離が進行しているが、わずかに刷毛目が残る。口径は6.8cm、器高は復原で7.6cmである。

土坑ＳＫ010（図版38－109）

須恵器杯身（109）

立ち上がりは内傾して伸び、端部は肥厚して、明瞭な段を有する。受部は水平に伸び、丸く収まる。外面の回転ヘラケズリは、約1/2に及んでいる。復原口径は10.9cmである。

土坑ＳＫ009（図版38－110・111）

須恵器杯身（110）

口径10.9cmの杯身である。口縁部は立ち上がりが高く、内傾気味に伸びる。端部はわずかに肥厚し平坦で、内傾する。身はやや浅く、底部はわずかに丸みを伴うように復原され、外面の約1/2に回転ヘラケズリを施す。受け部は薄く水平に伸びる。

須恵器直口壺（111）

小型の直口壺である。算盤玉形に張る体部の最大径は上半にあり、逆「ハ」の字形に短く開く口頸部がつく。この口頸部の中位にやや甘い2状の突帯を設け、その間に波状文を巡らせる。口縁端部は薄く、丸く仕上げる。体部最大径の部位には波状文が巡り、体部下半から底部にかけて平行叩き文を残し、内面はナデと下半には当て具の痕跡が認められる。口径は9.8cm、器高は13.7cmである。破断面は淡紫色を呈し、焼成は良好である。

土坑ＳＫ012（図版38－112～118）

土師器ミニチュア土器（112）

ミニチュアの鉢で、口径は6.7cm、器高は4.7cmである。粗雑ながら指によるナデとおさえの痕跡をとどめる。

土師器高杯（113～115）

113は杯部で、口径は14.8cm。浅い受部から口縁部が内弯気味に開くが、その境界は明瞭ではない。受部の内外面には、部分的に刷毛目が残存している。

114は口径は14.2cm、脚柱部から裾部が屈曲して大きく開く形態をもつ。内外面ともに摩滅が進行し、調整などの詳細は不明である。

115は同じく脚部である。裾部が開き、端部は丸く収める。脚径は9.9cmである。

113～115はいずれも胎土に砂粒を含む。

土師器鍋（116）

口径25.1cmの把手付鍋である。「く」の字に屈曲する口縁部は、端部が外傾して、凹線をもつ。外面は縦方向の刷毛目、内面は口縁部を横方向の刷毛目、体部はヘラのナデで調整している。焼成は甘く、歪みが生じている。

須恵器壺（117）

いわゆる二重口縁の須恵器壺である。外反した頸基部は、屈曲部外面にやや甘い突線を巡らせる。口縁部は外傾して直線的に開き、端部下方外面に凹線を施し、丸く収める。口径は復原で13.8cmである。

須恵器甕（118）

大型甕の体部で、肩が張り最大径が69.8cmである。内面は当て具痕を丁寧なナデで消している。

第5節　平安時代～鎌倉時代の調査

1．遺構

見つかった遺構には掘立柱建物跡8棟と、それに伴う井戸3基・土坑・雨落ち溝などがある。雨落ち溝は部分的に残っており、おそらく条里方向を示している。

掘立柱建物ＳＢ007（図版25）

Ａ地区の西側に位置する。東西３間×南北４間の総柱建物で、全体に残存状況は良くない。

東西方向の柱間は不均等で、西側２間分が1.6～1.7m、東側１間分が3.1～3.6mで、東側１間分の桁間の幅をほぼ倍にしている。南北方向の柱間は東西方向のような極端な変化はなく、1.4～1.9mの範囲に収まる。柱間が比較的狭く、等間隔である側を梁とするならば、棟は東西方向で、棟方向の方位はＮ85°Ｗである。建物の規模は東西6.8m、南北6.0m、床面積約40㎡である。

柱穴からの遺物は細片ばかりで、図化できるものはなかった。

掘立柱建物ＳＢ008（図版25）

Ｂ地区の東側に位置する。東西３間×南北４間の総柱建物で、全体に残存状況は良くない。

東西方向の柱間は不均等で、西側１間分が3.1m、中央が1.8～2.1m、東側が2.7mで、中央に対し両側の桁間の幅を広くしている。南北方向の柱間はほぼ一定で、1.6～1.8mの範囲に収まる。棟は東西方向で、棟方向の方位はＮ86°Ｗである。建物の規模は東西7.7m、南北6.9m、床面積約53㎡である。

遺物は柱穴Ｐ10から瓦器椀（119）が出土した。

掘立柱建物ＳＢ009（図版26）

Ｃ－東区の北側に位置する。東西３間×南北４間の総柱建物で、攪乱で失われた箇所以外の柱穴はすべて確認できた。ただし北西隅の柱穴は壁面での確認である。

東西方向の柱間は不均等で、西側１間分が2.1m、中央が1.8m、東側が3.4mで、東側１間分の桁間の幅を広くしている。南北方向の柱間はほぼ一定で、1.7～2.0mである。棟は東西方向で、棟方向の方位はＮ84°Ｗである。建物の規模は東西7.2m、南北7.3mとほぼ正方形で、床面積約53㎡である。

建物東側の桁間が広くなった空間には、楕円形の土坑ＳＫ014がある。

遺物は柱穴Ｐ37から瓦器椀（120・121）・土師器皿（122）、Ｐ38から土師器三足付き羽釜（123）、Ｐ20から須恵器片口鉢（124）が出土した。

掘立柱建物ＳＢ010（図版26）

Ｃ－東区、ＳＢ009の真南に位置する。東西３間×南北４間の総柱建物で、攪乱で失われた箇所以外の柱穴はすべて確認できた。

東西方向の柱間は不均等で、西側１間分が2.0～2.1m、中央が2.3～2.4m、東側が3.1mで、東側１間分の桁間の幅を広くしている。南北方向の柱間はほぼ一定で、1.6～1.8mである。棟は東西方向で、棟方向の方位はＮ86°Ｗである。それに対し妻方向の方位はＮ８°Ｅで、柱穴の配列が全体に平行四辺形を呈している。建物の規模は東西7.6m、南北6.9mで、床面積約52㎡である。

建物東側の桁間が広くなった空間の南外側には、井戸ＳＥ002および方形の土坑ＳＫ015がある。

遺物は柱穴Ｐ116から瓦器椀（125）・土師器羽釜（127）、Ｐ115から土師器小皿（126）・瓦器鍋（137）が出土した。

掘立柱建物ＳＢ011（図版27）

Ｃ－東区・中央区に位置し、建物の東半がＳＢ010に、西半がＳＢ013に重複している。東西３間×南北５間の総柱建物で、撹乱で失われた箇所以外の柱穴はすべて確認できた。

東西方向の柱間は不均等で、西側１間分が2.4m、東側２間分が2.8～3.0mで、東側２間分の桁間の幅を広くしている。南北方向の柱間はほぼ一定で、1.6～1.7mである。棟は東西方向で、棟方向の方位はＮ84°Ｗである。建物の規模は東西8.3m、南北7.7mで、床面積約64㎡である。

建物東側の桁間が広くなった空間の南外側には、方形の土坑ＳＫ016がある。また建物の西外側には雨落ち溝ＳＤ021が辛うじて認められる。

遺物は柱穴Ｐ128から土師器皿（128）、Ｐ158から滑石製石鍋（129）が出土した。

掘立柱建物ＳＢ012（図版27）

Ｃ－中央区の南側、ＳＢ013の真南に位置する。東西２間×南北３間の総柱建物で、柱穴はすべて確認できた。

東西方向の柱間は1.8～2.0m、南北方向の柱間は1.3～1.6mである。棟はおそらく南北方向で、棟方向の方位はＮ３°Ｅである。建物の規模は東西3.8m、南北4.5mで、床面積約17㎡である。

遺物は柱穴Ｐ219から瓦器椀（130）が出土した。

掘立柱建物ＳＢ013（図版28）

Ｃ－中央区に位置し、建物の東半がＳＢ011に重複している。東西３間×南北５間の総柱建物で、撹乱で失われた箇所以外では東辺の北から第２列目の柱穴が見つからなかった。

東西方向の柱間は不均等で、西側１間分が1.8m、中央が2.2m、東側が2.6mで、東側ほど桁間を幅広くしている。南北方向の柱間も不均等で、北側４間分が1.4～1.7m、南側１間分が2.2～2.4mで、南側１間分の柱間を幅広くしている。棟は東西方向とみられ、南北方向に梁間をとるものであるが、南側１間分の柱間は不自然で、基本は東西３間×南北４間の建物と考えられる。また北側１間分の内側半間のところに補助的な柱を備えている。棟方向の方位はＮ87°Ｗである。建物の規模は東西6.7m、南北8.6mで、床面積約58㎡である。

建物の北辺中央には井戸ＳＥ03を設置している。また桁間・梁間とも広くなった礎物南東隅の外側には、方形の土坑ＳＫ017がある。また建物の西外側には雨落ち溝ＳＤ022が南北に延びている。

遺物は柱穴Ｐ203から瓦器椀（131）、Ｐ205から瓦器椀（132）が出土した。

掘立柱建物ＳＢ014（図版28）

Ｃ－中央区・西区、ＳＢ013の南西に位置する。東西３間×南北２間の建物で、東側２間分の中央の柱は抜けている。

柱間は東西方向・南北方向とも2.0～2.2mである。棟はおそらく東西方向で、棟方向の方位はＮ88°Ｗ

である。建物の規模は東西6.3m、南北4.2mで、床面積約26㎡である。

建物の北側と西外側にはそれぞれ雨落ち溝ＳＤ023・024があり、両者は西北隅で交差している。またＳＤ024は南端で条里溝ＳＤ025に突き当たっている。

柱穴からの遺物は細片ばかりで、図化できるものはなかった。

条里溝ＳＤ019・020、ＳＤ025・026（図版24・30）

掘立柱建物ＳＢ010～ＳＢ014を南北で挟み込むように、東西方向の溝が２本ずつ平行に走っている。これは条里型地割りに則した溝と考えられ、２本１組で通路の側溝となっているのであろう。

北側のＳＤ019・020はＳＢ009とＳＢ010・011・013の間を通っており、これらの建物はこの通路に面して向かい合っていた。また南側のＳＤ025・026もＳＢ012・014の敷地を区画している。この２組の通路の間隔はおよそ22mで、12間という単位が与えられる。

井戸ＳＥ001（図版29）

Ｂ地区の中央、掘立柱建物ＳＢ008の南西側に位置する。素掘りの井戸で、平面は円形、掘り方は底に向かってやや狭くなる。検出面から底までの深さは1.1m、底のレベルはＯ.Ｐ.4.15mである。

遺物は瓦器小皿（138）、土師器小皿（139）・皿（140）が出土した。

井戸ＳＥ002（図版29）

Ｃ－東区の掘立柱建物ＳＢ010の南東隅に位置する。素掘りの井戸で、平面は扁円形、掘り方はほぼ垂直である。検出面から底までの深さは1.75m、底のレベルはＯ.Ｐ.3.7mである。底面の東寄りには径30cm、深さ20cmほどの小穴が掘り込まれていた。

遺物は青磁碗（141）が出土した。

井戸ＳＥ003（図版29）

Ｃ－中央区の掘立柱建物ＳＢ013の北辺に位置する。素掘りの井戸で、平面は隅丸方形、掘り方はやや不整だが、底面は方形である。検出面から底までの深さは2.1m、底のレベルはＯ.Ｐ.3.35mである。底面の南寄りに35cm×25cm、深さ50cmの小穴が掘り込まれていた。出土遺物に図化できるものはなかった。

土坑ＳＫ013（図版30）

Ｃ－東区の掘立柱建物ＳＢ09の西外側に位置し、西半を攪乱によって削平されている。平面は不整円形で、径1.45m、深さ10cmである。

図化した遺物には瓦器椀（142・143）、土師器小皿（144～147）・皿（148）・鍋（149）・羽釜（150）がある。

土坑ＳＫ014（図版30）

Ｃ－東区の掘立柱建物ＳＢ009の東側１間の内部に位置する。平面は不整長円形で、1.75m×1.15m、深さ15cmである。

図化した遺物には瓦器椀（164）、土師器羽釜（165）がある。

土坑ＳＫ015（図版30）

Ｃ－東区の掘立柱建物ＳＢ010の南外側の東寄りに位置し、東北隅を井戸ＳＥ002に切られている。平面は隅丸長方形で、長軸を東西方向にとる。底面は水平に掘り込む。大きさは2.2m×1.75m、深さ15cmである。土坑は１度掘り直されているようで、東辺に当初の掘り方の痕跡が残っている。

図化した遺物には土師器小皿（160）がある。

土坑ＳＫ016（図版31）

Ｃ－東・中央区の掘立柱建物ＳＢ011の南外側の東寄りに位置する。平面は隅丸長方形で、長軸を東西方向にとる。底面は水平に掘り込む。大きさは3.3m×1.75～2.15m、深さ30cmである。北西隅と南東隅には東西方向の細い溝が取り付いている。溝は幅10cm、深さ５cmほどで、土坑より相当浅い。土坑は１度掘り直されているようで、東辺に当初の掘り方と溝の痕跡が残っている。

図化した遺物には瓦器椀（151）・小皿（152）、土師器小皿（153・154）・羽釜（156・157）、須恵器片口鉢（155）、白磁碗（158）、青磁碗（159）がある。

土坑ＳＫ017（図版31）

Ｃ－中央区の掘立柱建物ＳＢ013の南外側の東寄りに位置する。平面は隅丸長方形で、長軸を東西方向にとる。底面は水平に掘り込む。大きさは2.7m×1.75m、深さ20cmである。

図化した遺物には瓦器椀（162）、白磁碗（163）がある。

土坑ＳＫ018（図版30）

Ｃ－東区の土坑ＳＫ016の南側に位置する。平面は長方形で、長軸を東西方向にとる。底面は水平に掘り込む。大きさは1.6m×0.8m、深さ５cmである。

図化した遺物には瓦器椀（161）がある。

土坑ＳＫ019（図版30）

Ｃ－東区の土坑ＳＫ016の北辺を切っている。平面は円形で、径0.5m、深さ15cmである。

図化した遺物には瓦器小皿（166）がある。

土坑ＳＫ020（図版30）

Ｃ－中央区の掘立柱建物ＳＢ013の北側１間の内部に位置する。平面は円形で、径0.55m、深さ10cmである。

図化した遺物には須恵器耳皿（167）がある。

２．遺物

掘立柱建物ＳＢ008（図版39－119）

瓦器椀（119）

体部はやや低く開き、高台の断面は逆台形である。体部外面には指頭圧痕が残り、ヘラミガキは認められない。内面は見込みに連結輪状、体部に渦巻き状にヘラミガキを施す。口径14.3cm、器高4.1cm。

掘立柱建物ＳＢ009（図版39－120～124）

瓦器椀（120・121）

120は体部がやや深手で内弯気味に開き、高台は断面三角形である。体部外面には指頭圧痕が顕著に残り、ヘラミガキは認められない。内面は見込みから体部にかけて渦巻き状にヘラミガキを施す。口径15.9cm、器高5.45cm。

121は体部はやや低く開き、高台の断面はやや潰れた逆台形である。体部外面には指頭圧痕が残り、ヘラミガキは認められない。内面は見込みに連結輪状、体部に渦巻き状にヘラミガキを施す。口径15.5cm、器高4.4cm。

土師器皿（122）

手捏ね成形で、口縁部に１段のヨコナデを施す。口径12.7cm、器高2.15cm。

土師器羽釜（123）

体部上半はやや内傾気味だが、傾きは強くない。鍔部は短く、端面が沈線状となる。鍔部の下に脚部の剥がれた痕跡があり、三足付きの羽釜となる。口径20.8cm、残存高10.4cm。

須恵器片口鉢（124）

口縁部の細片で、端部をつまみ上げている。

掘立柱建物ＳＢ010（図版39－125～127・137）

瓦器椀（125）

体部は下半で一旦腰が張った後、上外方へ開く。底部は欠失している。体部外面には指頭圧痕が残り、ヘラミガキは認められない。体部内面には横方向のヘラミガキを施す。口径14.8cm、残存高3.4cm。

土師器小皿（126）

手捏ね成形で、口縁部に１段のヨコナデを施す。口径8.2cm、器高1.2cm。

土師器羽釜（127）

口縁部は内傾気味に高く立ち上がる。鍔部は水平方向に長く伸び、端面が沈線状となる。体部内外面の調整はハケメで仕上げる。口径23.7cm。

瓦器鍋（137）

受け口状の口縁部の破片である。口縁部の下には指頭圧痕が残る。口径31.1cm。

掘立柱建物ＳＢ011（図版39－128・129）

土師器皿（128）

手捏ね成形で、口縁部に１段のヨコナデを施す。体部内外面には指頭圧痕が顕著に残る。口径12.3cm、器高2.4cm。

滑石製石鍋（129）

体部は内弯気味に開き、鍔部を断面台形に削り出す。体部内外面に成形時のノミ跡とヤスリ跡が残る。口縁部と底部を欠失した破片で、割れ口を磨いて何かに転用している。鍔部径は24.0cmに復元できる。

掘立柱建物ＳＢ012（図版39－130）

瓦器椀（130）

体部は内弯気味に開くが、底部を欠失する。体部外面には指頭圧痕が残り、内面は摩滅のため不明である。口径12.7cm。

掘立柱建物ＳＢ013（図版39－131・132）

瓦器椀（131・132）

131は低平な体部で、口縁部を１段にヨコナデする。高台は粘土紐を貼付するのみ。体部外面には指頭圧痕が残る。内面は見込みから体部にかけて渦巻き状にヘラミガキを施す。口径12.8cm、器高3.15cm。

132も131とほぼ同形・同大で、口縁部を２段にヨコナデする。内面の調整は見込みに粗い平行線状の暗文を施した後、体部に太めのヘラミガキを施す。口径13.0cm、器高3.05cm。

その他のピット（図版39－133～136）

瓦器椀（133・134）

133は底部を欠失する。体部外面には指頭圧痕が顕著に残る。内面は見込みの平行線状の暗文の後、体部に横方向のヘラミガキを施す。口径13.4cm。

134は体部が低く内弯気味に開く。調整は摩滅のため、ほとんど判らない。口径15.2cm、器高3.8cm。

瓦器小皿（135）

口縁部を１段にヨコナデする。口径7.5cm、器高1.5cm。

土師器小皿（136）

手捏ね成形である。口径8.9cm、器高1.4cm。

井戸ＳＥ001（図版39－138～140）

瓦器小皿（138）

口縁部に１段のナデを施し、底面に指頭圧痕が残る。口径8.3cm、器高1.7cm。

土師器小皿（139）

手捏ね成形で、口縁部に１段のナデを施す。口径8.6cm、器高1.3cm。

土師器皿（140）

手捏ね成形で、口縁部に１段のナデを施す。口径13.0cm、器高2.65cm。

井戸ＳＥ002（図版39－141）

青磁碗（141）

口縁端部と底部を欠失する。外面には櫛状工具による文様、内面には圏線と草花文の一部が残る。同安窯系の製品とみられる。

土坑ＳＫ013（図版40－142～150）

瓦器椀（142・143）

142は体部が内弯気味に開き、口縁部を１段にヨコナデする。高台は断面三角形である。体部外面には指頭圧痕が顕著に残り、ヘラミガキは認められない。内面は見込みから体部にかけて連結輪状にヘラ

ミガキを施す。口径14.9cm、器高4.3cm。

143は口縁部を２段にヨコナデする。内面の調整は見込みから体部にかけてヘラミガキを施す。口径14.9cm、器高4.5cm。

土師器小皿（144～147）

手捏ね成形で、口縁部を１段にヨコナデする。144は口径7.3cm、器高1.5cm。145は口径7.9cm、器高1.5cm。146は口径8.25cm、器高1.55cm。147は口径10.0cm、器高1.5cm。

土師器皿（148）

手捏ね成形で、口縁部を１段にヨコナデする。口径13.9cm、器高2.5cm。

土師器鍋（149）

口縁部はくの字に屈曲し、端部を丸く収める。胴部最大径は体部の上半にあり、口径を凌がない。体部外面は縦から斜め方向のハケメ、内面は横方向のハケメで仕上げる。体部中程に脚の基部が残っており、三足付きの鍋であったことが判る。口径23.5cm、残存高10.9cm。

土師器羽釜（150）

体部上半はやや内傾し、鍔部は比較的薄く、短い。体部内面はハケメで仕上げる。口径30.6cm。

土坑ＳＫ016（図版40－151～159）

瓦器椀（151）

体部は下半で一旦屈が張った後、内弯気味に開く。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には見込みに平行線状の暗文、体部に渦巻き状のヘラミガキを施す。口径15.0cm、器高4.4cm。

瓦器小皿（152）

口縁部に１段のナデを施し、底面に指頭圧痕が残る。口径8.2cm、器高1.25cm。

土師器小皿（153・154）

手捏ね成形で、口縁部を１段にヨコナデ。153は口径8.4cm、器高1.55cm。154は口径8.0cm、器高1.2cm。

須恵器片口鉢（155）

口縁部はあまり拡張させず、端部に面をとる。細片のため不明瞭だが、口径31.8cmに復元した。

土師器羽釜（156・157）

156は口縁部が短く直立する。口縁部には粘土紐の接合痕が観察できる。口径31.0cm。

157は口縁部が高く内弯気味に内傾し、４段にヨコナデする。鉄鍋を写した形態をとる。体部内面はハケメで仕上げる。口径28.7cm。

白磁碗（158）

体部の細片で、詳細は不明である。

青磁碗（159）

体部下半の細片で、内面に草花文の一部が観察できる。龍泉窯系の製品とみられる。

土坑ＳＫ015（図版40－160）

土師器小皿（160）

口縁部に１段のヨコナデを施し、端部に面をとる。口径9.4cm、器高1.95cm。

土坑ＳＫ018（図版40－161）

瓦器椀（161）

体部は低く開き、口縁部を２段にヨコナデする。体部外面には指頭圧痕が顕著に残り、内面には横方向のヘラミガキを施す。口径14.35cm、器高3.8cm。

土坑ＳＫ017（図版40－162・163）

瓦器椀（162）

体部は低平で、口縁部を１段にヨコナデする。高台は粘土紐を貼り付けただけである。体部外面には指頭圧痕が顕著に残り、内面には横方向のヘラミガキを施す。口径13.8cm、器高2.95cm。

白磁椀（163）

玉縁をもつ口縁部の細片である。口径15.0cmに復元した。

土坑ＳＫ014（図版40－164・165）

瓦器椀（164）

底部の破片で、高台は断面逆台形を呈する。見込みには平行なヘラミガキが密に施され、それを弧状のヘラミガキが切っている。

土師器羽釜（165）

口縁部から直立気味の体部中程までの破片である。口縁部の立ち上がりは短く、鍔部の張り出しも短い。鍔部には数箇所にわたって粘土を貼り付けて瘤状に膨らました部分があるが、意識的なものかどうかは不明である。体部には粘土紐の接合痕が観察でき、外面は縦方向のイタナデで仕上げ、内面はユビオサエのままである。口径21.8cm、残存高13.4cm。

土坑ＳＫ019（図版40－166）

瓦器小皿（166）

口縁部に１段のナデを施す。口径8.25cm、器高1.5cm。

土坑ＳＫ020（図版40－167）

須恵器耳皿（167）

口縁部の破片で、耳状に弯曲する箇所の一部である。

溝ＳＤ020（図版40－168）

白磁碗（168）

口縁部は外反気味に開く。口径10.1cm。

包含層（図版40－169）

施釉陶器蓋（169）

壺の一部かとみられる細片である。幕末以降の京・信楽系の製品である。口径9.0cm。

第3章 ま と め

第1節 弥生時代前期

1．遺構

C地区南半部で検出した3条の大型の溝には、2つの方向のものがある。溝SD001はC地区の南東隅を南西－北東方向へ直線的に横切る。一方、溝SD002・SD003はC地区の南西隅を内側にして緩やかな弧を描きながら、北西－南東方向へ並行に走る。3条の溝の底面の高低差は約20cm程のなだらかな傾斜で、SD001については北東方向へ向かって傾斜している。またSD002は遺構の西側（C－西区と拡張区との境界周辺）の底面が最も高く、それを境に東西方向へそれぞれ傾斜していく状況が看取される。

溝内の堆土は3条ともシルト質極細砂を主体とする粒子の微細な堆積で、植物遺体を含む層もなく、湛水状況を示していない。溝の傾斜の状況とも考え合わせると、水路のような機能は想定しがたい。

3条の溝それぞれが機能した時期については、土層断面（図版7 B－B'・D－D'）の堆積状況に類似する部分があることや出土土器の様相から、ほぼ同時期に捉えて良いと考える。

この溝の性格については、他に同時期の目立った遺構が検出されていないため不明な点が多い。ただしSD002とSD003については弧状の溝が2条、ほぼ並行して南西側の何かを取り巻く意識を窺わせており、水路というよりも区画の意味合いが強いものと考えられる。そこに連想されるものは居住域や貯蔵施設に環壕を巡らした初期的環壕集落のイメージであるが、竪穴住居や貯蔵穴など個別の遺構が見つかっていない現状では判断を保留せざるをえない。

しかしこれまで武庫川右岸下流域の沖積地では、同時期の遺跡は甲風園遺跡が知られていたのみで、具体的な内容が判ったのは今回の調査が初めてである。今回の調査結果のみでは集落の全容を復原するには不充分であるが、例えば神戸市西区の王津出中遺跡では、微高地を単位とする小規模な集落のあり方が明らかとなっている（兵庫県教委1996）。また神戸市兵庫区大開遺跡では、弥生時代前期古段階の環濠集落（神戸市教委1993）に隣接する形で、中段階以降の多重環濠が見つかっている。北口町遺跡も今後甲風園遺跡を含めた周辺の遺跡の状況が明らかとなることで、評価が深化するものと思われる。

2．遺物

溝出土の土器は多条のヘラ描き沈線を施す壺・甕などの中に混じって、貼付け凸帯上にキザミを施す壺や、「逆L」字状を呈する甕の口縁部などがあり、弥生時代前期でも新段階のものと考えられる。

出土した土器の中で特徴的なものに、SD002出土の壺（19・20）がある。それはほぼ完形の壺の胴部を焼成後に打ち抜いた（あるいは穿孔した）土器で、20には1箇所、19に至っては対面する2箇所の部分に穿孔が認められた。土器の状態からは明らかに人為性が窺われ、また出土状況も溝の埋没段階（溝がやや埋まった状態）に集中廃棄されていることから、何らかの意識的な行為と推測される。その性格・目的は不明で、ここでは事実報告のみに止め、今後の出土例の増加と見解を待ちたい。

兵庫県教育委員会1996 『王津田中遺跡－第6分冊－』

神戸市教育委員会1993 『大開遺跡発掘調査報告書』

第２節　弥生時代後期～古墳時代前期

遺物の年代の上ではＶ様式期・庄内式期・布留式期の幅があり、さらに細かな時期設定も可能ではある。しかし時期を判別できる遺構の割合が少なく、不確定要素の多い細分となるため、１つの段階としてまとめた。切り合い関係や他の遺構との関連のみで、この段階とした遺構も含む。

竪穴住居のうちＳＨ001とおそらくＳＨ002はＶ様式期のものとみられる。ベッド状の高床部を持つＳＨ003は庄内期に多い構造だが、脚付壺（46）はやや古い様相を示している。方形４本柱のＳＨ004～007は中央土坑を持たず、ＳＨ007のみが壁際に炉を有している。庄内期以降の住居構造と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ001～005はいずれも２間×２間の方形で、竪穴住居ＳＨ004～007の柱間とほぼ同規模である。建物の配置も対応関係を示しており、両者は同時期かあるいは連続性をもつ可能性がある。ただし建物の柱穴からの遺物はごく僅かで、確実な所属時期は不明である。

調査区の西端に溝ＳＤ006が南北に通っており、集落の西限を区画している。土坑ＳＫ001・003～006はいずれもこの溝の東岸付近に集中しており、居住域の縁辺部を避地している。中でもＳＫ001・003・006は井戸であったかもしれない。これらの溝・土坑には庄内期～布留期にかけての土器が多量に廃棄されていた。

ＳＤ006の勾配は南から北へ向かって0.2／55mのわずかな傾斜をもって下っている。これは周辺の地形から見れば逆勾配であるが、谷中の水田域へ配水するためのものかもしれない。

ＳＤ006より西側は微高地面に比べて数10cm低くなっており、シルト質の土壌層も発達しており、水田域が広がっていたものと考えられる。水田面は洪水砂に覆われており、南西400mで調査された高松町遺跡の弥生時代後期の水田面につながる可能性がある。

兵庫県教育委員会2001　『高松町遺跡』

第３節　古墳時代中期～後期

古墳時代中期～後期の遺構としたものには柵列・掘立柱建物・土坑がある。柵列ＳＡ003はきわめて直線的・規則的な柱列で、柱穴も通常のものより一回り大きく、計画的に設計されたものと考えられる。調査区外でどのように続くかは不明だが、ＳＡ001とは約38mの間隔をおいて平行しており、ＳＡ002とは柱の間隔が一致している。

柵列で囲まれた内部の遺構は掘立柱建物１棟と土坑群のみであるが、出土遺物がほとんどなかったＳＢ001～004もこの時期に属する可能性がある。

これらの遺構のうちＳＡ003・ＳＫ009からは陶邑窯のＴＫ－47型式にあたる須恵器杯身（106・110）が出土している。直口壺（111）もⅠ期に類例が知られている。ＳＫ010の杯身（109）はＭＴ－15型式にあたる。

最も遺物量が多かった土坑ＳＫ012はＳＡ003に切られており、さらに時期の遡る資料とみられる。大型の須恵器甕（118）は内外面ともタタキの痕跡を磨り消しており、内面には多くの剥離痕跡が認められる。土師器鍋（116）は須恵器の把手付き鍋を模した器形である。

第4節　平安時代～鎌倉時代

1．遺物の検討

北口町遺跡の瓦器椀の形態は和泉型に近く、その型式変化などから3時期に分けられる。古い順に北口町遺跡の中世Ⅰ～Ⅲ期とする。なお年代観は森島康雄氏の瓦器の編年（森島1995）に基づく。

中世Ⅰ期／主な遺構：掘立柱建物ＳＢ009、土坑ＳＫ013・ＳＫ014・ＳＫ016

瓦器椀は口径15cm、器高4.5cm前後で、見込みに連結輪状および平行線状のヘラミガキを施す。森島編年Ⅲ－1期の範疇に相当し、12世紀後葉の年代が与えられる。ただし瓦器椀（120・164）・土師器羽釜（165）はさらに時期の遡るもので、遺構の年代幅を示すものかもしれない。

中世Ⅱ期／主な一括遺物：掘立柱建物ＳＢ008・ＳＢ010、土坑ＳＫ018

瓦器椀は口径15cm未満、器高4.0cm前後で、法量がやや縮小する。森島編年Ⅲ－2～3期にあたり、12世紀末～13世紀前葉の年代が与えられる。

中世Ⅲ期／主な一括遺物：掘立柱建物ＳＢ013、土坑ＳＫ017

瓦器椀は口径14cm未満、器高3.0cm前後の極端に扁平な器形で、高台は粘土紐状となる。森島編年Ⅳ－1～2期の段階で、13世紀中葉の年代が与えられる。

2．遺構の変遷

重複する3棟の建物ＳＢ010・011・013を中心に考えることができる。これらは少しずつ場所をずらしながら連続的に建て替えられており、建物の南東側に方形土坑を付設する点も受け継がれている。この3棟は条里溝ＳＤ019・020とＳＤ025・026に区画された空間に位置する。この2組の溝は条里の坪境そのものではなく、内部の小区画とみられ、両者の間隔はおよそ22m、12間という単位が与えられる。この空間にはＳＢ012・014も含めて、中世Ⅰ～Ⅲ期にわたる1世帯の変遷を読み取ることができる。

また母屋クラスのＳＢ007～011・013については、3間×4～5間の規模に土間状の広い間口を有する構造が共通している。

3基の井戸はいずれも素掘りだが、中世Ⅱ期～Ⅲ期の間に底が数10cm深くなっているのが判る。底をさらに坪掘りしている痕跡も認められ、地下水位の急激な低下が窺える。

雨落ち溝ＳＤ024から西側では中世の遺構が急に稀薄となっており、集落域の西限とみられる。

中世Ⅰ期／主な遺構：掘立柱建物ＳＢ009・ＳＢ011、土坑ＳＫ013・ＳＫ014・ＳＫ016

中世Ⅱ期／主な遺構：掘立柱建物ＳＢ008・ＳＢ010、井戸ＳＥ001・ＳＥ002、土坑ＳＫ015

中世Ⅲ期／主な遺構：掘立柱建物ＳＢ013、井戸ＳＥ003、土坑ＳＫ017

北口町遺跡の南東700mにある高畑町遺跡でもほぼ併行する時期の集落が調査されており、数棟の掘立柱建物・井戸・土坑などが検出されている。北口町遺跡と比較すると、井戸側に曲げ物を用いている点、四耳壺など輸入陶磁器が目立つ点などが指摘できる。

両遺跡は距離的には近接するものの、間に段丘崖を挟んでおり、異なる微高地に立地する隣村的な関係といえる。

森島康雄1995　「6．瓦器椀（3）編年」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

兵庫県教育委員会1999　『高畑町遺跡（Ⅱ）』

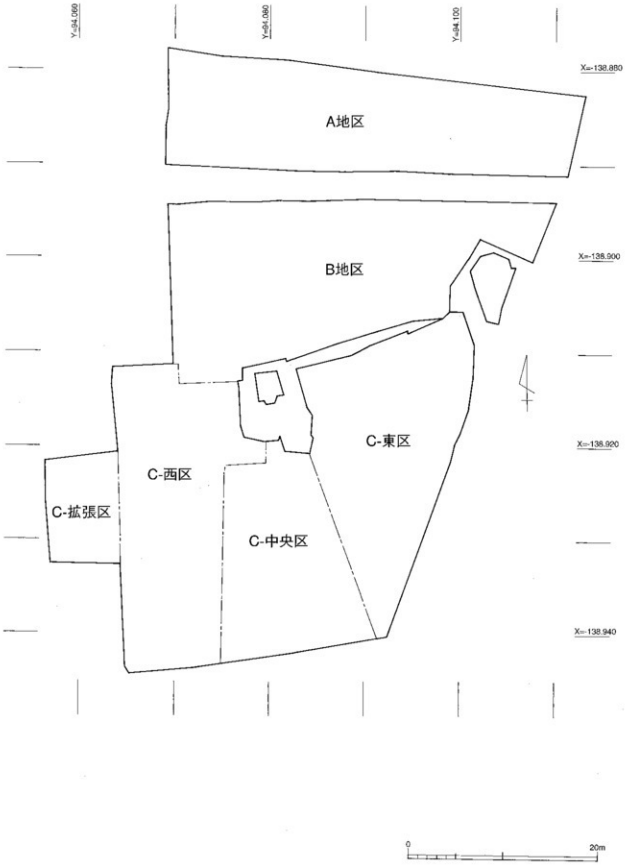
兵庫県教育委員会2000　『高畑町遺跡（Ⅲ）』

図　　版

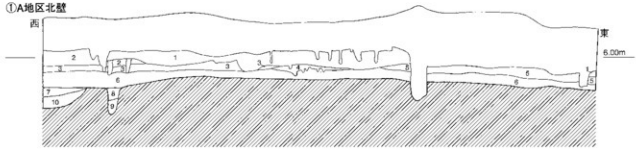
Y=64.0km
Y=64.1km
N
X=-138.8km
X=-138.9km
X=-139.0km
平成9年度A地区
平成9年度B地区
平成10年度C地区
0
100m

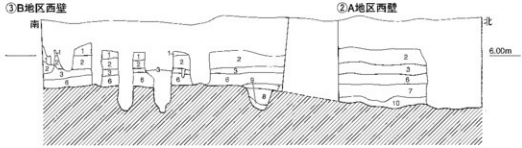
調査区位置図

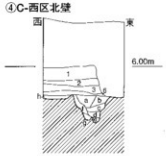
図版 2

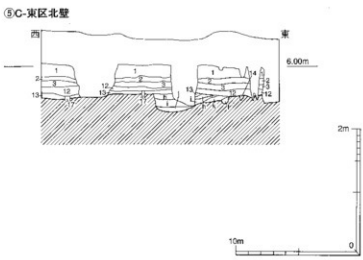

Y=64,060
Y=64,110
X=-138,880
X=-138,900
X=-138,920
X=-138,940
A地区
B地区
C-東区
C-西区
C-拡張区
C-中央区
0
20m

調査区設定図





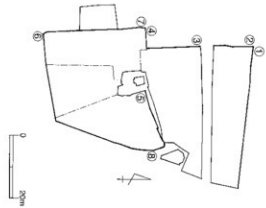




1. 7.5Y7/1　灰色　シルト質極細砂（凹耕土）
2. 7.5G Y5/1　緑灰色　極細砂～細砂　ラミナ
3. 5G Y7/1　オリーブ灰色　極細砂～中砂（上半部soil）
4. 5B G6/1　青灰色　細砂
5. 2.5Y 4/1　黄灰色　中砂
6. 5G Y4/1　暗オリーブ灰色　シルト質極細砂～細砂（soil）小礫含む
7. 7.5Y 4/1　灰色　礫砂
8. 7.5Y R4/3　褐色　シルト質極細砂
9. N3/0　暗灰色　中砂
10. 5B G6/1　青灰色　中砂
11. 2.5G Y4/1　暗オリーブ灰色　シルト質極細砂～粗砂（上面soil）土器含む
12. 2.5Y 6/2　灰黄色　中砂混じりシルト質細砂（粗砂含む）Fe_2O_3、（soil）
13. 2.5Y 6/1　黄灰色　極細砂～細砂（粗砂含む）Fe_2O_3ラミナ
14. 2.5G Y2/1　黒色　シルト質極細砂　土器含む
15. 2.5Y 5/3　暗オリーブ褐色　シルト混じり細砂（中粗砂含む）土器含む
16. 10Y R3/2　黒褐色　極細砂質シルト　土器多量に含む　炭含む：ＳＤ58内埋土
17. 2.5Y 5/1　黄灰色　シルト質極細砂～細砂　シルトブロック含む、土器含む

a. 10Y R3/1　黒褐色　礫砂（中砂含む）炭粒、土器含む
b. 5Y 4/2　灰オリーブ色　極細砂～細砂　土器含む
c. 5Y 4/1　灰色　シルト混じり細砂　炭粒、土器含む　ベースブロック上流入
d. 2.5 Y 4/1　黄灰色、シルト混じり細砂　炭粒含む
e. 7.5Y 5/1　灰色　シルト質細砂
f. 5Y 3/2　オリーブ黒色　極細砂～細砂（中砂含む）炭粒、土器含む
g. 5Y 4/1　灰色　極細砂～細砂　炭粒含む

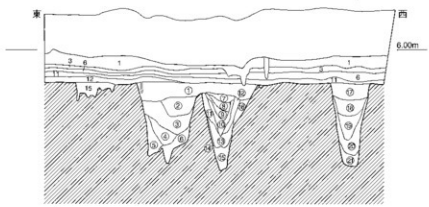
h. 10Y R3/1　黒褐色　シルト質極細砂（粗砂含む）土器多量に含む
i. 10Y R3/2　黒褐色　シルト質極細砂（粗砂含む）土器多量に含む
j. 7.5Y R3/1　黒褐色　シルト質極細砂（粗砂含む）土器、地山ブロック含む
k. 2.5Y 4/2　暗灰黄色　シルト質極細砂土器含む
l. 2.5Y 4/1　黄灰色　極細砂



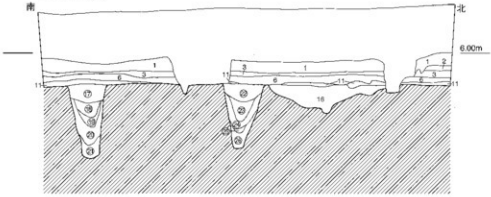
土層断面図（１）

図版３

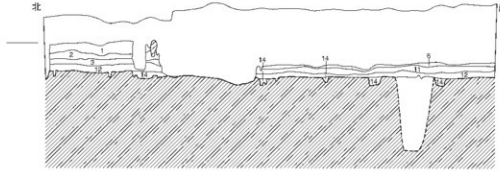
⑥C-中央区南壁



⑦C-西区西壁



⑧C-東区東壁

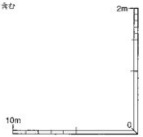


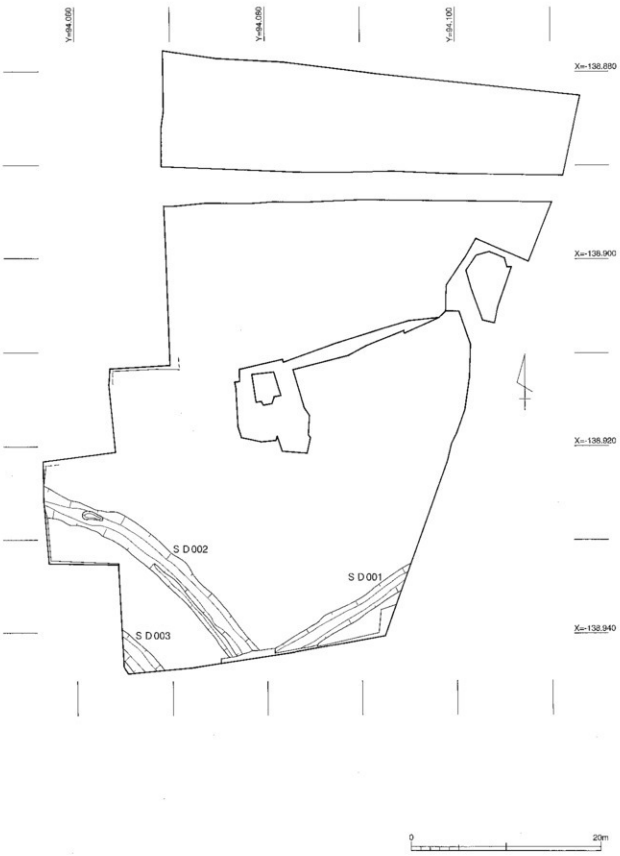
① 7.5Y5/1　灰色　極細砂
② 5Y4/1　灰色　シルト質極細砂（中砂含む）　炭含む
③ 2.5Y4/1　黒色　シルト質極細砂（中砂含む）　炭含む
④ 5Y3/2　オリーブ黒色　シルト質極細砂（中砂含む）　炭、土器含む
⑤ 5Y3/2　オリーブ黒色　シルト質極細砂（中砂含む）
⑥ 5Y3/2　オリーブ黒色　シルト質極細砂　黒色シルトブロック混入

⑦ 2.5Y4/1　黄灰色　細砂～粗砂混じりシルト　土器含む
⑧ 2.5Y3/2　黒褐色　極細砂質シルト　土器多く含む
⑨ 2.5Y3/1　黒褐色　極細砂質シルト　小礫、土器多く含む
⑩ 2.5Y3/3　濃オリーブ褐色　極細砂質シルト　炭、土器多く含む
⑪ 2.5Y5/1　黄灰色　極細砂質シルト　土器含む
⑫ 2.5Y5/2　暗灰黄色　極細砂質シルト　グラニュール、土器含む
⑬ 2.5Y4/2　暗灰黄色　極細砂混じりシルト　シルトブロック、土器含む
⑭ 2.5Y5/3　黄褐色　シルト
⑮ 5Y4/1　灰色　シルト質極細砂　シルトブロック、土器含む
⑯ 2.5Y5/1　黄灰色　極細砂～中砂混じりシルト

⑰ 5Y4/1　灰色　シルト質極細砂（soil）　土器多く含む
⑱ 7.5Y4/1　灰色　シルト質極細砂（soil）　炭、土器多く含む
⑲ 5Y3/1　オリーブ黒色　シルト質極細砂～粗砂　白色シルトブロック含む
⑳ 5Y4/1　灰色　シルト質極細砂　土器含む
㉑ 2.5Y3/2　黒褐色　極細砂質シルト　シルトブロック多く含む

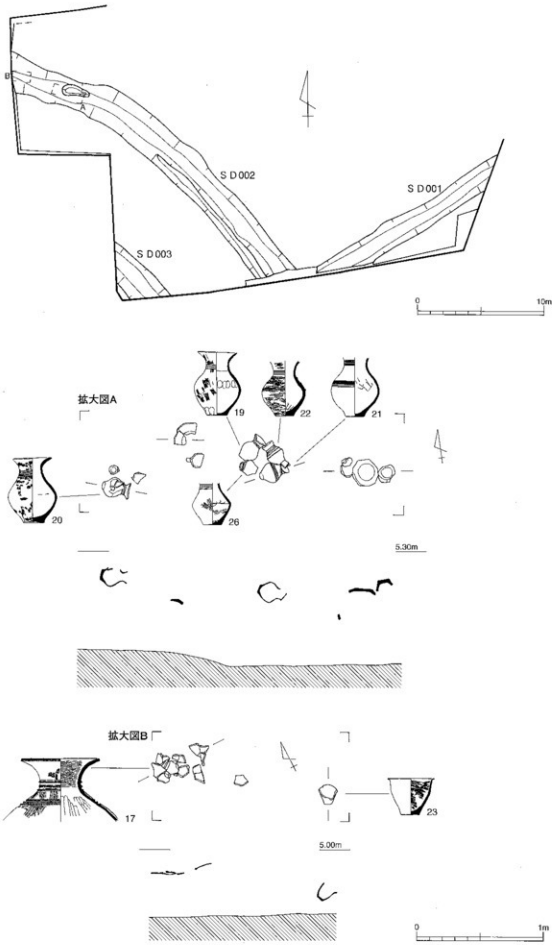
㉒ 2.5Y4/1　黄灰色　極細砂質シルト（soil）　土器多く含む
㉓ 10YR3/2　黒褐色　シルト質極細砂　炭、土器多く含む
㉔ 2.5Y4/1　黄灰色　シルト質極細砂　炭、土器多く含む
㉕ 5Y4/1　灰色　極細砂質シルト
㉖ 2.5Y4/1　黄灰色　シルト質極細砂



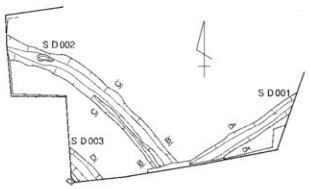

Y=84.050
Y=84.080
Y=84.100
X=-138.880
X=-138.900
X=-138.920
X=-138.940
S D002
S D001
S D003
0
20m

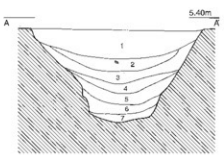
弥生時代前期全体図

図版 6

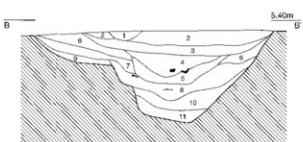


弥生時代前期平面図

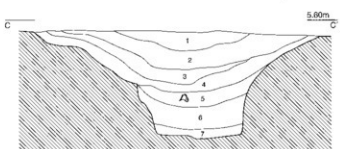




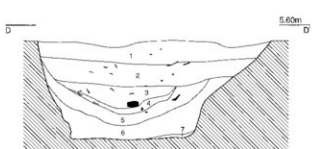
1. 2.5Y5/1　黄灰色　極細砂質シルト　土器、炭　上層　黄灰色土
2. 2.5Y4/1　黄灰色　シルト質極細砂　土器、炭　上層　黄灰色土
3. 5Y4/1　灰色　シルト質極細砂　土器、炭　中層　暗灰色土
4. 5Y4/1　灰色　シルト質極細砂　シルトブロック　パッチ状、炭　中層　暗灰色土
5. 5Y4/1　灰色　シルト質細砂　中層　暗灰色土
6. 5Y4/1　灰色　シルト　下層　青灰色土
7. 5Y3/1　オリーブ黒色　シルト～極細砂　シルトブロック含む　下層　青灰色土



1. 2.5Y4/2　暗灰黄色　細砂
2. 2.5Y5/1　黄灰色　極細砂～細砂　土器炭粒　小礫含む
3. 2.5Y4/1　黄灰色　シルト質極細砂　土器、小礫含む
4. 5Y4/1　灰色　シルト質極細砂　土器炭粒　小礫含む
5. 2.5Y4/1　黄灰色　シルト質極細砂　土器炭粒
6. 2.5Y4/2　暗灰黄色　シルト質極細砂（中砂含む）
7. 2.5Y5/1　黄灰色　礫砂（中粗砂含む）炭
8. 2.5Y5/1　黄灰色　シルト質極細砂（ベースブロック含む）土器炭粒
9. 2.5Y5/1　黄灰色　極細砂（中粗砂含む）
10. 2.5Y4/1　黄灰色　シルト質極細砂～シルト（一部ベースブロック含む）十器
11. 5Y4/1　灰色　シルト質極細砂～シルト



1. 2.5Y4/1　黄灰色　シルト質極細砂　土器
2. 5Y4/1　灰色　シルト質極細砂　上器
3. 5Y4/1　灰色　極細砂質シルト　土器多い
4. 2.5Y4/1　黄灰色　極細砂質シルト　土器
5. 2.5Y4/2　暗灰黄色　シルト質極細砂　下器
6. 2.5Y4/1　黄灰色　極細砂質シルト
7. 5.5Y3/1　黒褐色　シルト　シルトブロック含む

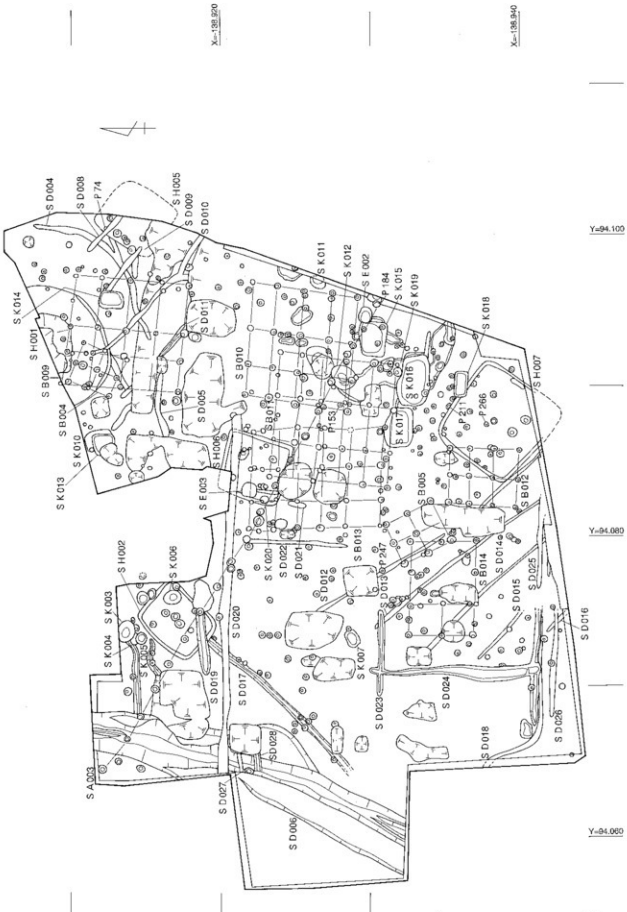


1. 5Y5/1　灰色　極細砂質シルト　上器　Soil
2. 5Y4/1　灰色　シルト質極細砂　土器多い炭粒
3. 5Y5/2　灰オリーブ色　シルト質極細砂～細砂　粗砂～極粗砂含む　中礫　土器多い炭粒
4. 10Y R3/1　黒褐色　コーンシルト炭が層状を成す　土器
5. 5Y4/1　灰色　極細砂質シルト　土器炭粒
6. 5Y4/1　灰色　極細砂～礫砂質シルト
7. 7.5Y4/1　灰色　シルト質極細砂ラミナ

弥生時代前期断面図

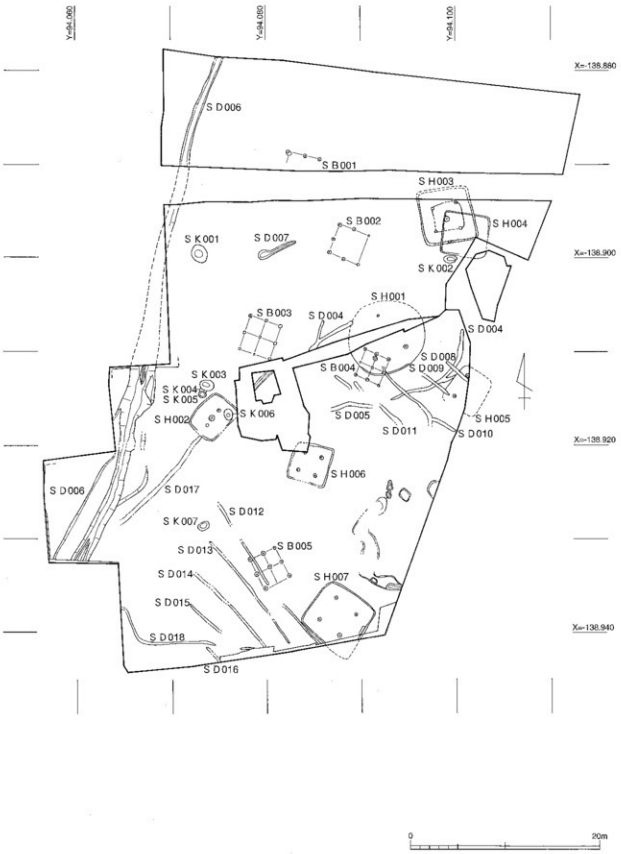
図版 8

弥生時代後期～鎌倉時代全体図（A・B地区）

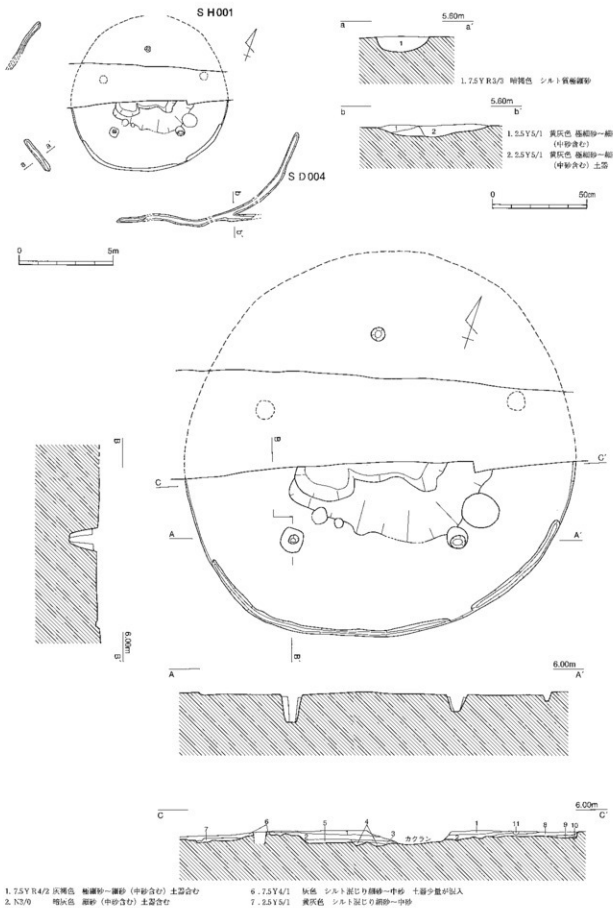


弥生時代後期～鎌倉時代全体図（C地区）

図版10

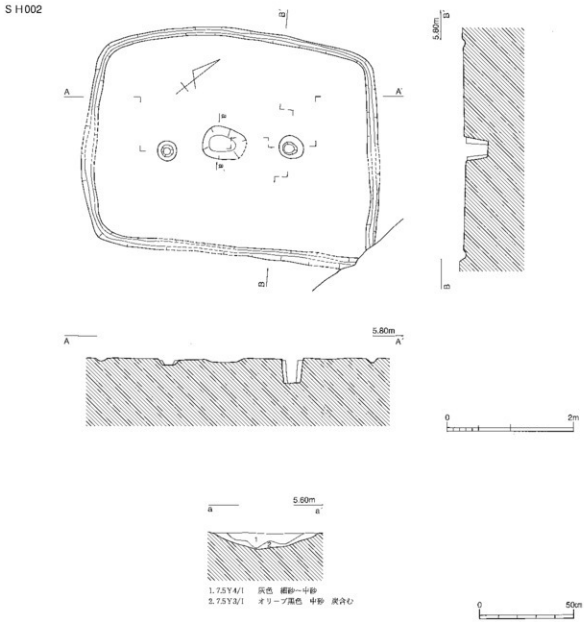


弥生時代後期～古墳時代前期全体図

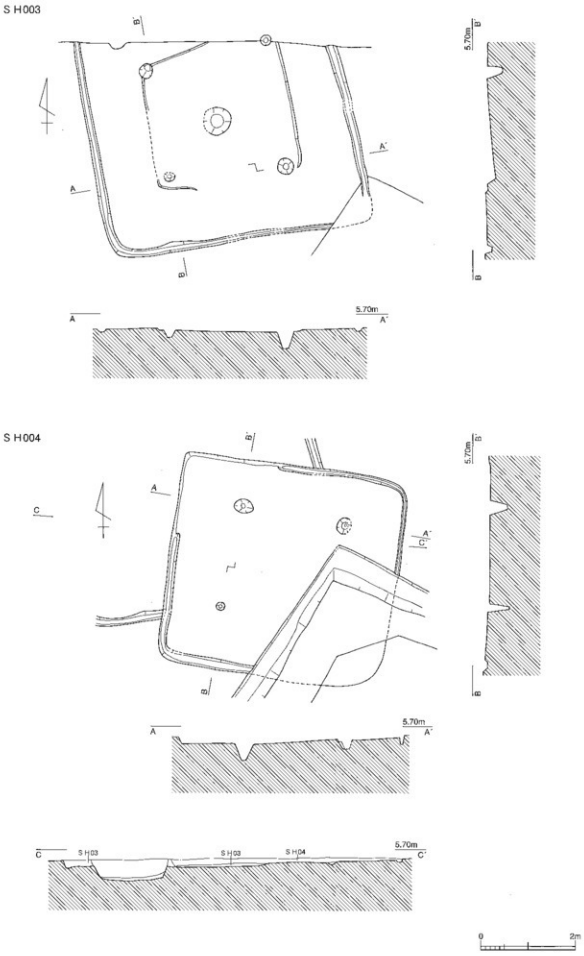

S H001
S D004
5.60m
1. 7.5Y R3/3 暗茶色 シルト質極細砂
1. 2.5Y 5/1 黄灰色 極細砂～細砂（中砂含む）
2. 2.5Y 5/1 黄灰色 極細砂～細砂（中砂含む）土器
0 50cm
0 5m
6.00m
1. 7.5Y R4/2 灰褐色 極細砂～細砂（中砂含む）土器含む
2. N3/0 暗灰色 細砂（中砂含む）土器含む
3. 2.5Y 5/2 暗灰色 細砂（中砂含む）木器含む
4. 7.5Y R4/2 灰褐色 極細砂～細砂 土器少量含む 黄灰色地山ブロック混入
5. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細砂（中砂含む）
土器片含む 黄灰色地山ブロック混入
6. 7.5Y 4/1 灰色 シルト混じり細砂～中砂 土器少量が混入
7. 2.5Y 5/1 黄灰色 シルト混じり細砂～中砂
土壁片を含むがベースに近似する
8. 7.5Y 4/1 灰色 極細砂～細砂（中砂含む） S H01埋土
9. N3/0 暗灰色 極細砂～粗砂 S H01埋土
10. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 S H01埋土（崩壊面）
11. 7.5Y R4/1 褐灰色 細砂～中砂 S H01を切る Pit or 杭
0 2m

竪穴住居ＳＨ001

図版12



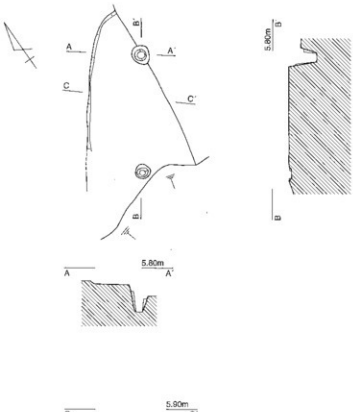
竪穴住居 S H002



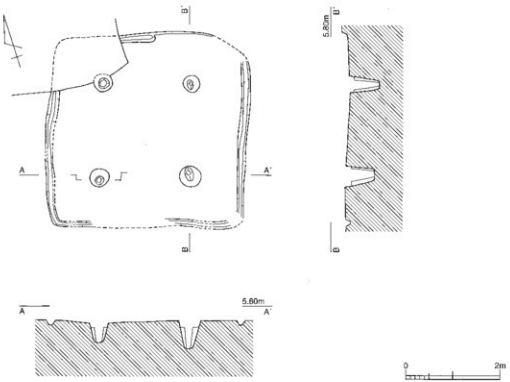
竪穴住居 S H003・004

図版14

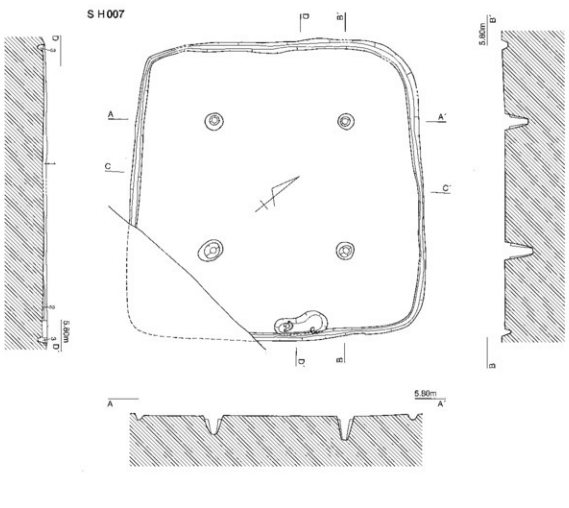
S H005

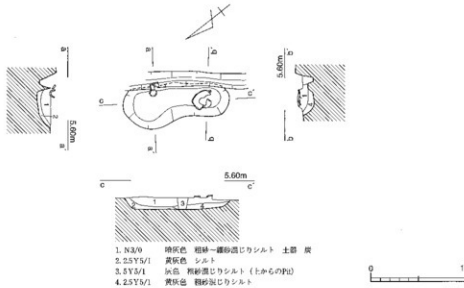


S H006

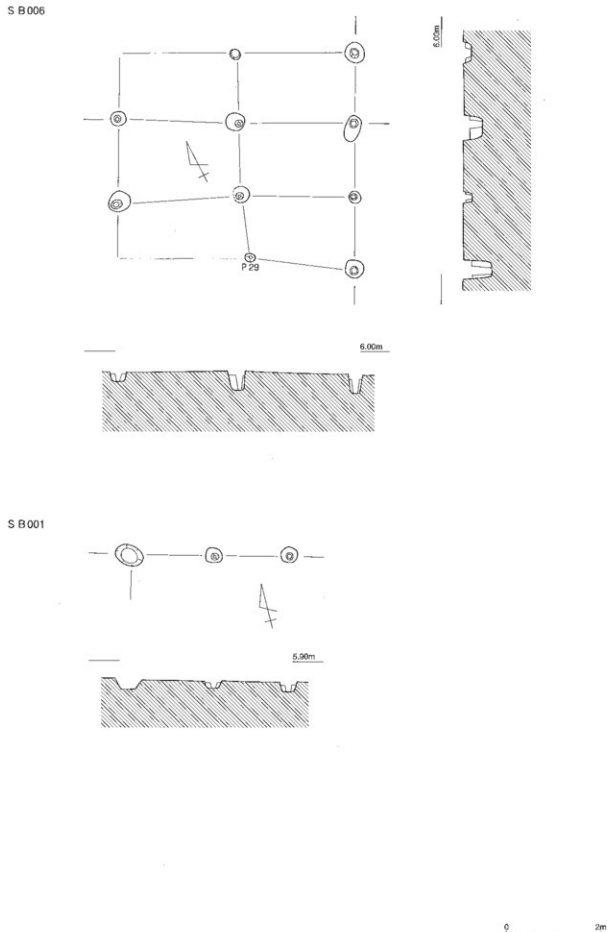


竪穴住居 S H005・006


S H007
5.80m
5.90m
1. 2.5Y5/1　黄灰色　シルト質細砂
2. N3/0　暗灰色　シルト質細砂
3. 2.5Y5/2　暗灰黄色　シルト質細砂
0
2m

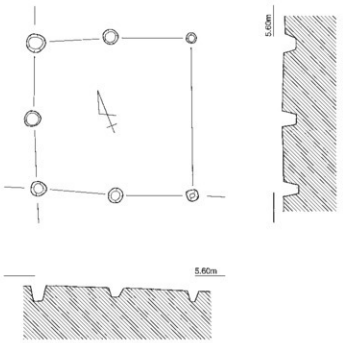

5.60m
5.60m
1. N3/0　暗灰色　粗砂～細砂混じりシルト　土器　炭
2. 2.5Y5/1　黄灰色　シルト
3. 5Y3/1　灰色　粗砂混じりシルト（上からのPit）
4. 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混じりシルト
0
1m

竪穴住居ＳＨ007

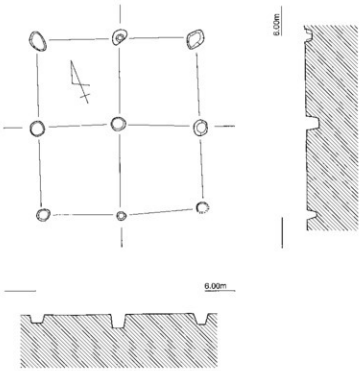


掘立柱建物S B006・001

S B002

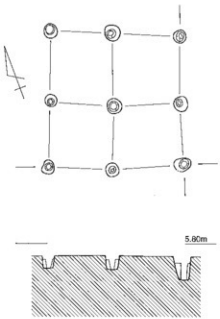


S B003

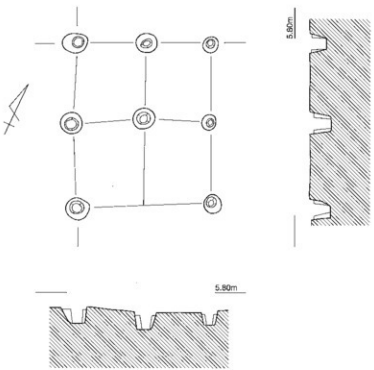


掘立柱建物S B002・003

S B004

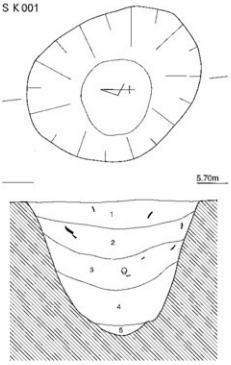


S B005



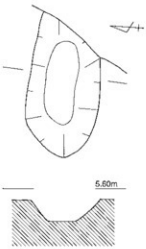
掘立柱建物S B004・005

S K 001

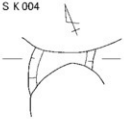


1. 10YR6/1　褐灰色　シルト質極細砂
2. 5Y4/1　灰色　極細砂
3. 5Y4/1　灰色　シルト
4. N3/　暗灰色　シルト
5. 5Y4/1　灰色　細砂

S K 002



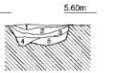
S K 004



S K 005

S K 003

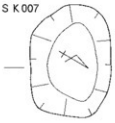
1. 2.5Y4/2　暗灰黄色　極細砂質シルト
　　土器・炭・Cobble
2. 2.5Y3/2　黒褐色　極細砂質シルト
　　土器・炭

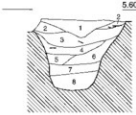


1. 5Y3/2　オリーブ黒色　極細砂～細砂　土器含む
2. 10Y R2/2　黒褐色　細砂（中砂含む）土器　炭含む
3. 5Y4/1　灰色　細砂（中砂含む）土器　炭含む
4. 7.5Y5/1　オリーブ黒色　シルト質石の細砂（中砂含む）
　　炭含む　ベースブロック混入
5. 5Y3/1　オリーブ黒色　極細砂～細砂（中砂含む）
　　土器・中礫含む　ベースブロック混入

S K 006

S K 007





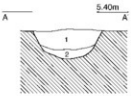
1. 5Y3/1　オリーブ黒色　細砂～中砂　土器　炭含む
2. 5Y3/2　オリーブ黒色　細砂（中砂含む）　土器含む
3. 2.5Y4/1　黄灰色　細砂～中砂　土器　炭含む
4. 2.5Y3/1　黒褐色　シルト質ロリ細砂（中砂～粗砂含む）
　　中礫含む　土器　炭含む
5. 5Y5/1　灰色　シルト質細砂（中砂含む）
6. 7.5Y4/1　灰色　シルト質細砂（中砂含む）
7. 2.5Y5/1　黄灰色　シルト質極細砂
8. 2.5Y4/1　黄灰色　シルト質極細砂～細砂　シルトブロック含む

1. 2.5Y3/1　黒褐色　極細砂質シルト　土器　炭
2. 2.5Y3/1　黒褐色　シルト～極細砂　土器　炭
3. 2.5Y3/1　黒褐色　シルト～極細砂
　　白色シルトブロック含む　土器　炭
4. 2.5Y3/2　黒褐色　極細砂質シルト　土器　炭

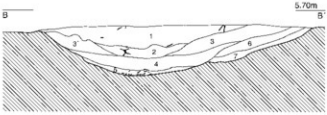
1. 5Y3/1　オリーブ黒色　細砂（中砂含む）土器　炭含む
2. 5Y4/2　灰オリーブ色　極細砂（中砂含む）
　　炭含む　ベースブロック混入
3. 2.5Y2/1　黒色　極細砂～細砂（中砂含む）
　　土器　炭含む

図版20

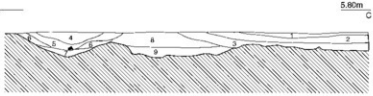
SD006



1. 7.5Y R4/3　褐色　シルト質極細砂
2. N3/　　暗灰色　中細砂

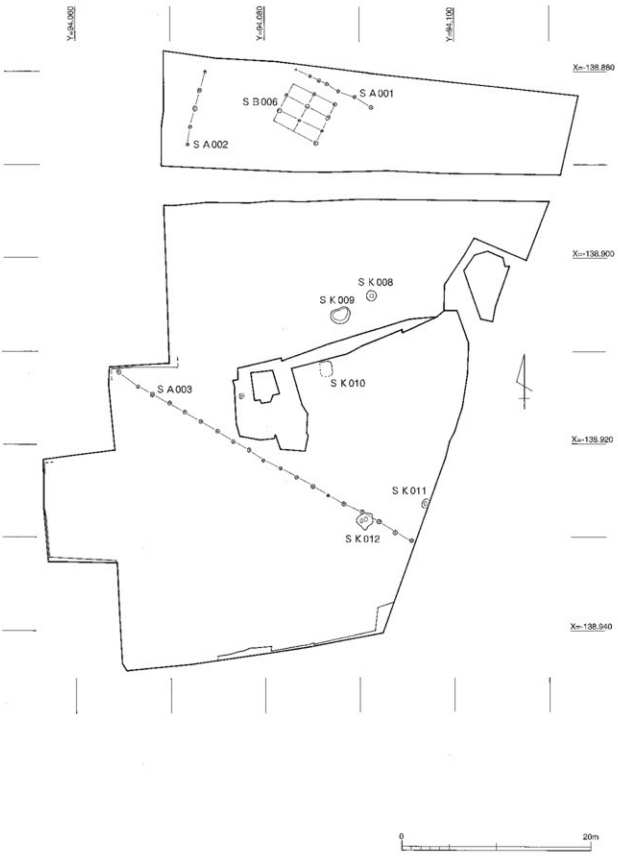


1. 10Y R2/1　黒色　極細砂質シルト　粗砂含む　土器多量　炭・Soil（中央上層）
2. 2.5Y4/1　黄灰色　極細砂～細砂質シルト　土器多量　炭（中央中層）
3. 5Y4/1　　灰色　極細砂～細砂　シルト含む　ラミナ　土器
3'. 5Y4/1　　灰色　極細砂～細砂　シルト含む　ラミナ（西壁部）
4. 2.5Y4/1　黄灰色　シルト質極細砂～細砂　ラミナ　土器
5. 5Y6/2　　灰オリーブ色　細砂～中砂　ラミナ　土器の礫片
6. 5Y4/2　　灰オリーブ色　極細砂
7. 10Y5/1　　緑色　シルト質極細砂　ラミナ

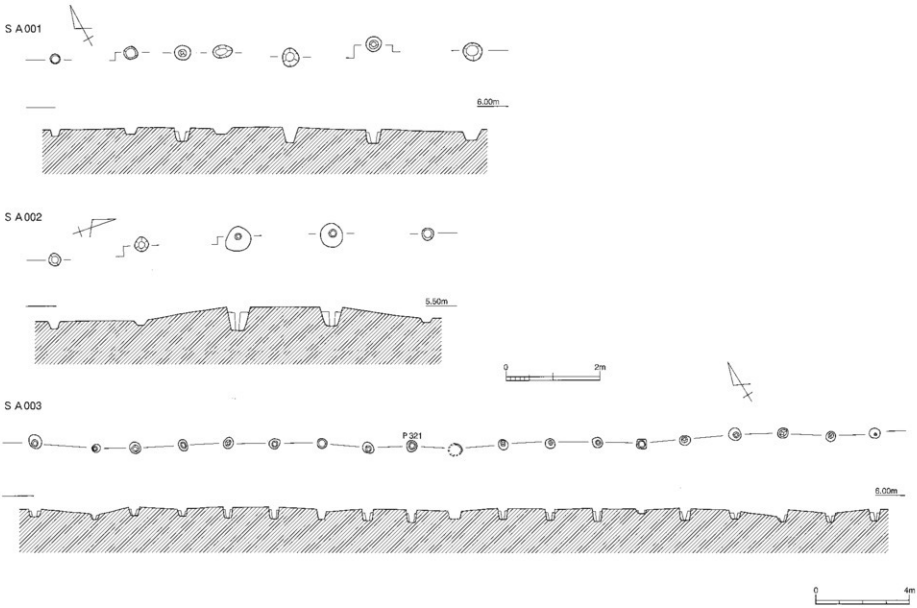


1. 5Y6/2　　灰オリーブ色　極細砂～粗砂　Soil・Fm O_3　土器
2. 5Y4/1　　灰色　極細砂～中砂　Soil　炭ばんじ ラミナ　土器　堆積層
3. 5Y4/2　　灰オリーブ色　極細砂質シルト　Soil　土器
4. 10Y R3/1　黒色　コースシルト　土器　炭　有機分多い
5. 10Y R3/1　黒褐色　シルト質極細砂　土器
6. 10Y R4/1　褐灰色　極細砂　上層
7. 10Y R4/1　褐灰色　シルト質極細砂　シルトブロック含む　土器
8. 5Y5/1　　灰色　極細砂　シルトブロック含む　土器
9. 5Y4/1　　灰色　極細砂　ラミナ　土器

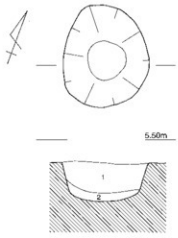
溝



古墳時代中期～後期全体図

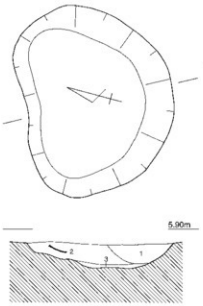

S A001
6.00m
S A002
5.50m
0
2m
S A003
P321
6.00m
0
4m

S K 008



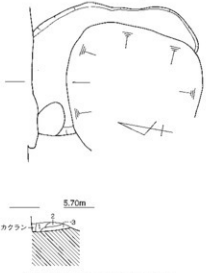
1. 10Y R3/1　黒褐色　シルト質極細砂
2. 10Y R3/1　黒褐色　シルト

S K 009



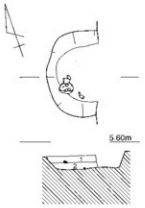
1. 5Y 5/1　　灰色　中砂
2. 10Y R3/4　暗褐色　シルト質極細砂
3. 10Y R2/1　黒色　シルト

S K 010



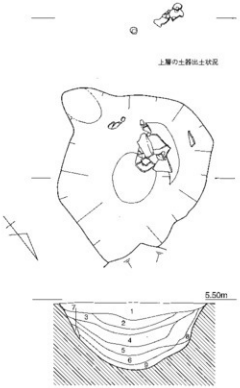
1. 10Y R5/1　褐灰色　中砂（マンガン粒含む）
2. 2.5Y 4/2　暗灰黄色　細砂～中砂
3. 2.5Y 5/1　黄灰色　細砂～中砂

S K 011



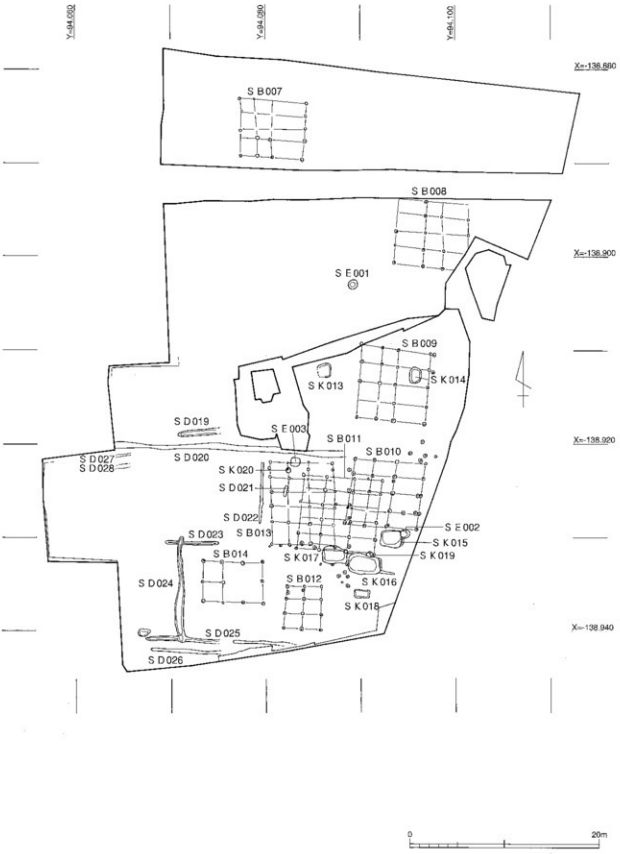
1. 10Y R4/3　にぶい黄褐色　粗砂混じりシルト質極細砂　土器含む
2. N3/　　暗灰色　中砂混じりシルト質細砂　中礫含む

S K 012

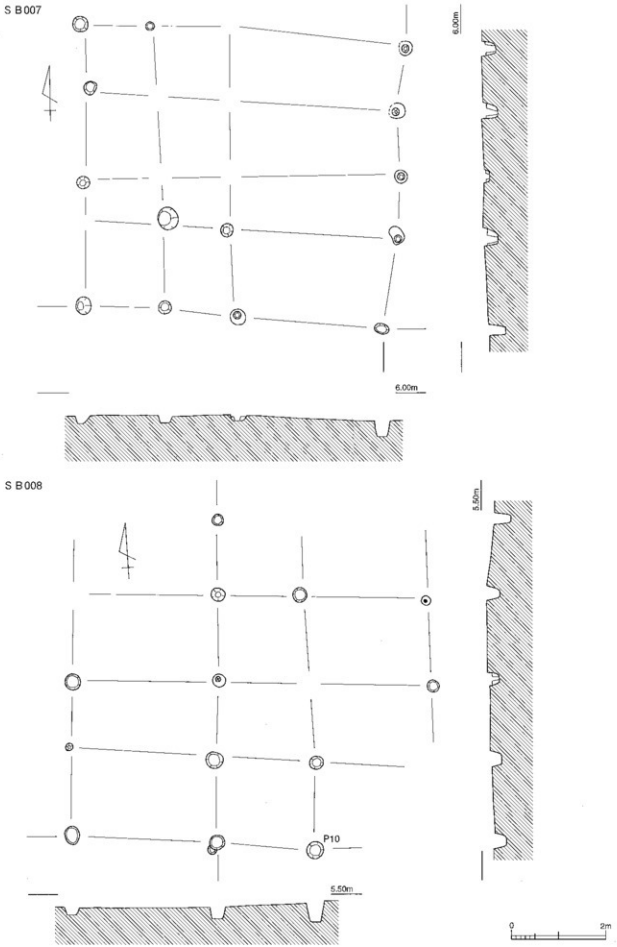


1. 10Y R5/1　褐灰色　粗砂混じり細砂質シルト　上器　炭・Soil
2. 7.5Y 4/2　灰褐色　細砂質シルト　土器多い　炭
3. 7.5Y 4/2　灰褐色　細砂質シルト　土器　炭
4. 5G Y 4/1　暗オリーブ灰色　粗砂質シルト　シルトブロック含む　土器
5. N3/　　暗灰色　シルト質極細砂　土器
6. N2/　　黒色　シルト　炭が層状に入る　土器
7. 10Y R4/1　褐灰色　シルト質極細砂
8. 10Y R4/1　褐灰色　シルト質極細砂
9. N3/　　暗灰色　極細砂質シルト～細砂（下面に亀裂の潰まり有り）　土器

図版24

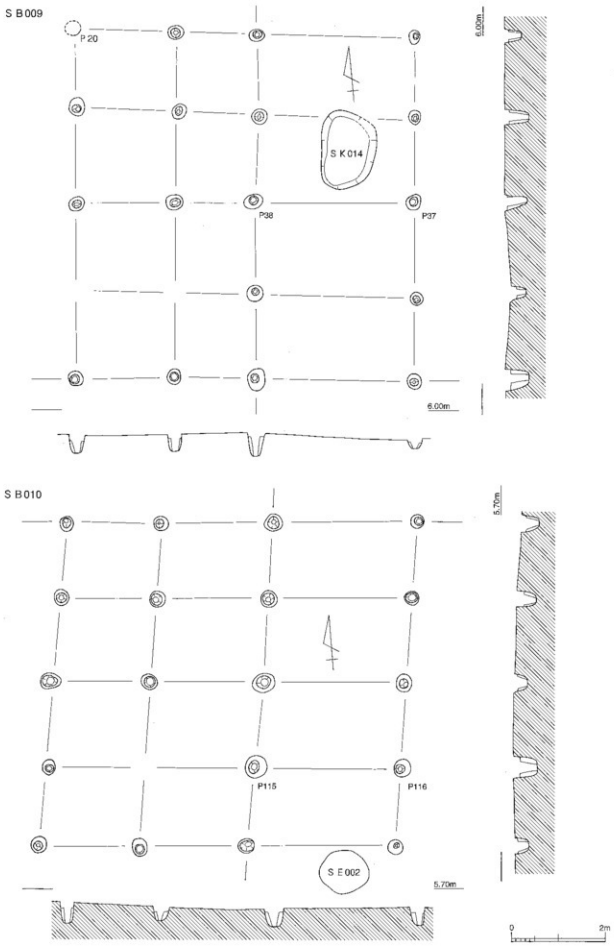


平安時代～鎌倉時代全体図

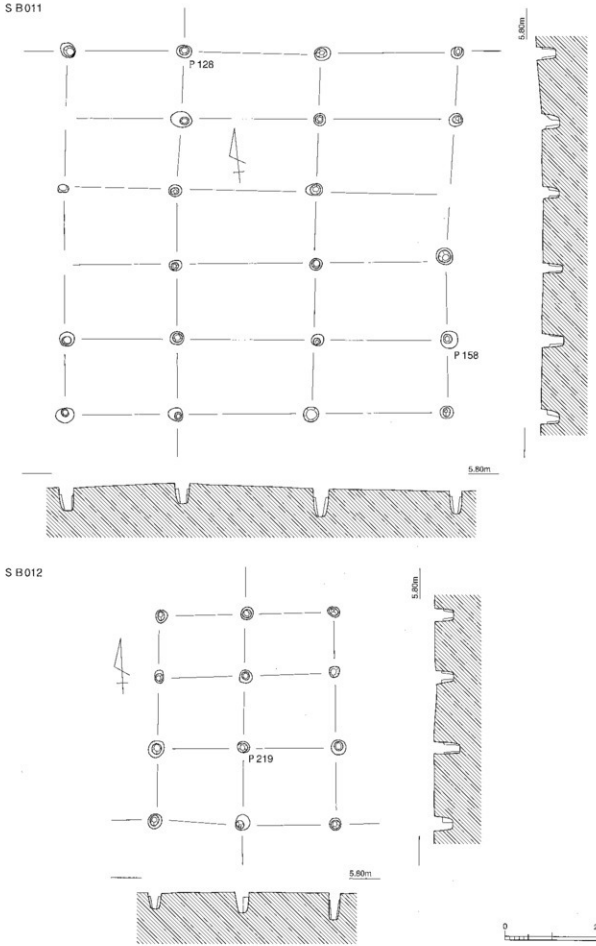


掘立柱建物S B007・008

図版26

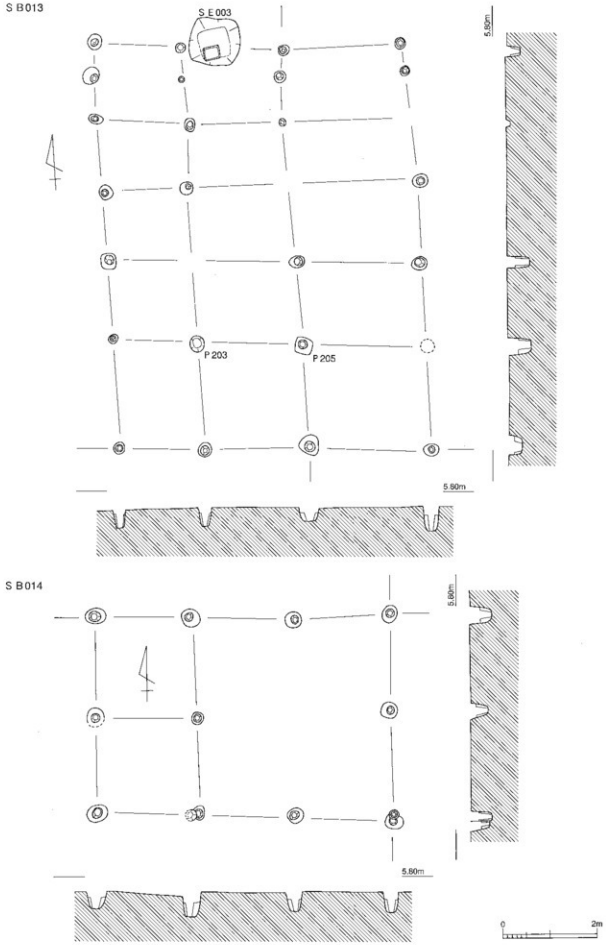


掘立柱建物S B009・010



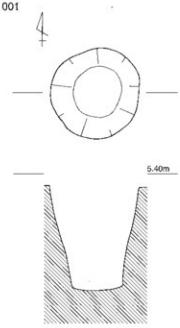
掘立柱建物S B011・012

図版28

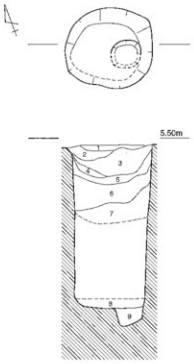


掘立柱建物S B013・014

S E001

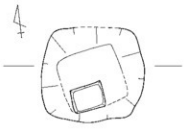


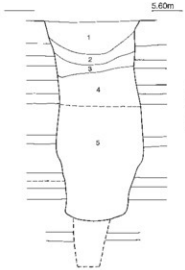
S E002



1. 7.5Y7/1　灰白色　中砂混じり細砂　上器
2. 2.5G Y4/1　オリーブ灰色　中砂混じり細砂　シルトブロック含む
3. 10Y R6/1　褐灰色　シルトブロックパッチ状　左側に細砂含む　土器
4. N3/0　暗灰色　シルト質細砂　シルトブロック含む
5. 7.5G Y4/1　暗緑灰色　シルト　細砂含む
6. 7.5G Y4/1　暗緑灰色　細砂混じりシルト　シルトブロック含む　土器・炭
7. 7.5G Y6/1　緑灰色　シルト
8. 7.5G Y5/1　緑灰色　シルト　褐色シルトブロック含む　木片
9. 7.5G Y7/1　明緑灰色　クレイ　シルトブロック含む

S E003

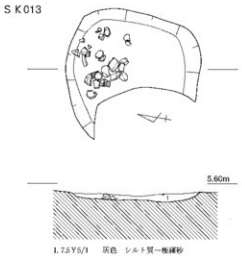




1. 7.5G Y6/1　緑灰色　細砂混じり　極細砂～細砂　シルトブロック含む
2. 5Y4/1　灰色　シルト質細砂～中砂　シルトブロックパッチ状
3. 7.5Y 4/1　灰色　中砂混じりシルト　シルトブロック含む
4. 5Y 4/1　灰色　シルト質細砂～中砂　シルトブロック含む
5. 2.5G Y6/1　オリーブ灰色　シルト質極細砂～細砂　シルトブロック含む　炭粒・木片含む

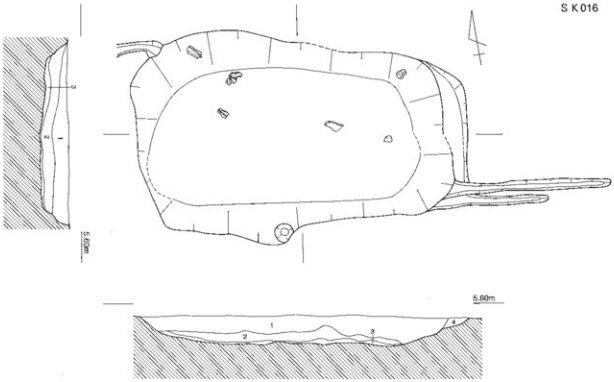
井戸ＳＥ001～003

図版30


S K013
5.60m
1. 7.5Y5/1　灰色　シルト質～極細砂
S K014
5.60m
1. N3/0　暗灰色　細砂～粗砂　シルトブロック含む（人為的な埋土）
　十器含む
2. 7.5Y3/1　灰色　シルト質極細砂
S E002
S K015
5.50m
1. 7.5Y7/1　灰白色　中砂混じり細砂　シルトブロック　土器
S K018
5.60m
S K019
5.50m
1. 7.5Y7/1　灰白色　中砂混じり細砂　土器
2. 7.5Y7/1　灰白色　中砂混じり細砂
3. 5B5/1　青灰色　細砂質シルト
S K020
5.60m
1. 7.5Y5/1　灰色　粗砂混じり　極細砂～細砂
　シルトブロック含む　土器・炭
2. 7.5Y4/1　灰色　シルト混じり　細砂～粗砂　土器・炭
S D020
5.60m
1. 10Y R5/2　灰黄褐色　中砂混じりシルト質極細砂
　（十器含む）
2. 7.5Y R5/2　灰褐色　シルトブロック
0
2m

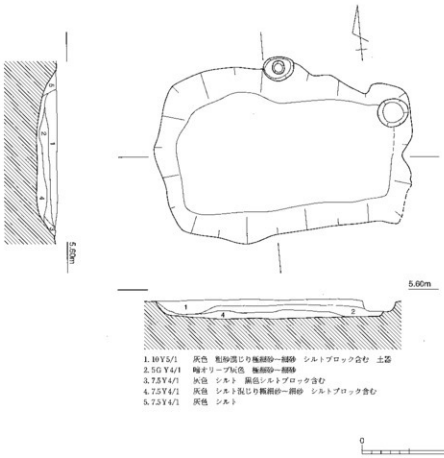
土坑（1）

S K016



1. 7.5Y7/1　灰白色　中砂混じり細砂　シルトブロック　土器
2. 7.5Y7/1　灰白色　中砂混じりシルト質細砂　シルトブロック　土器
3. 7.5Y4/1　灰色　極細砂質シルト　ラミナ　土器
4. 5B5/1　青灰色　シルト　(埋め土?)

S K017

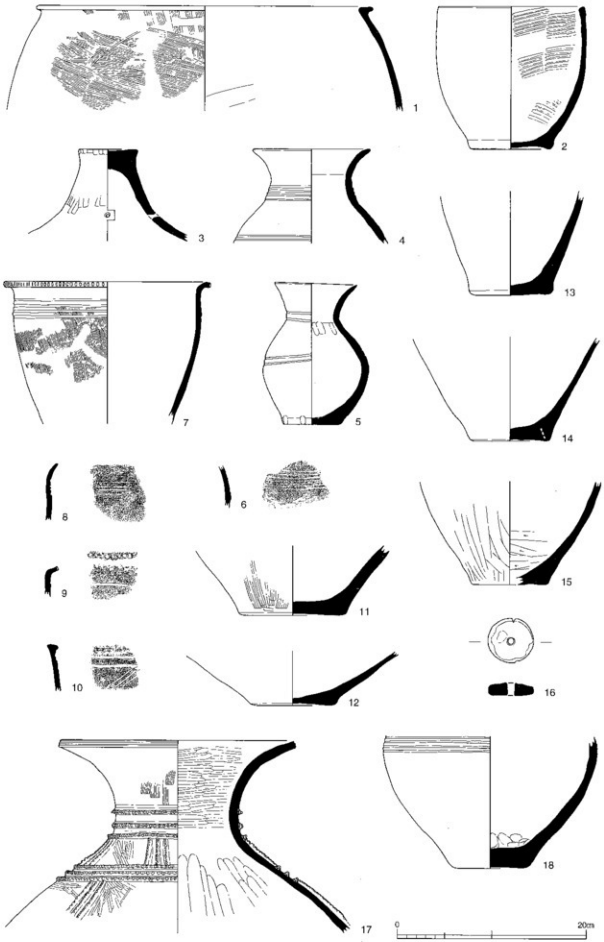


1. 10Y5/1　灰色　粗砂混じり極細砂～細砂　シルトブロック含む　土器
2. 5G Y4/1　暗オリーブ灰色　極細砂～細砂
3. 7.5Y4/1　灰色　シルト　黒色シルトブロック含む
4. 7.5Y4/1　灰色　シルト混じり極細砂～細砂　シルトブロック含む
5. 7.5Y4/1　灰色　シルト

0　2m

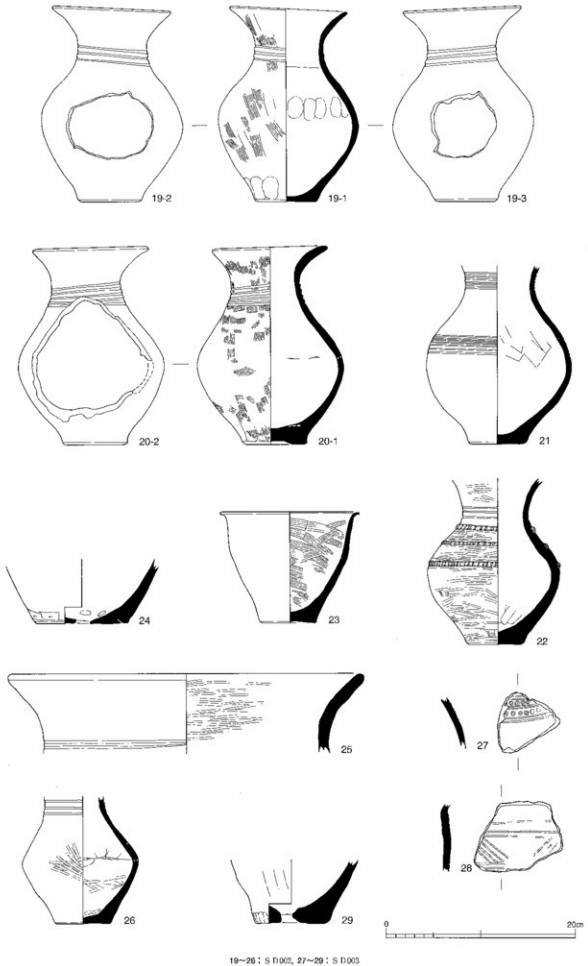
土坑（2）

図版32



1～3：SD001, 4～18：SD002

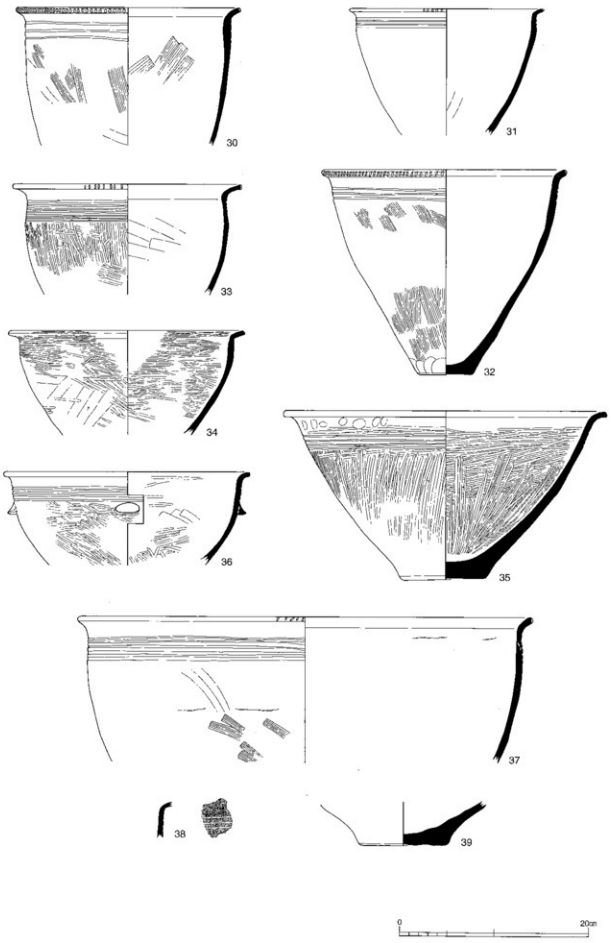
弥生時代前期の土器（1）



19~26：S D003, 27~29：S D003

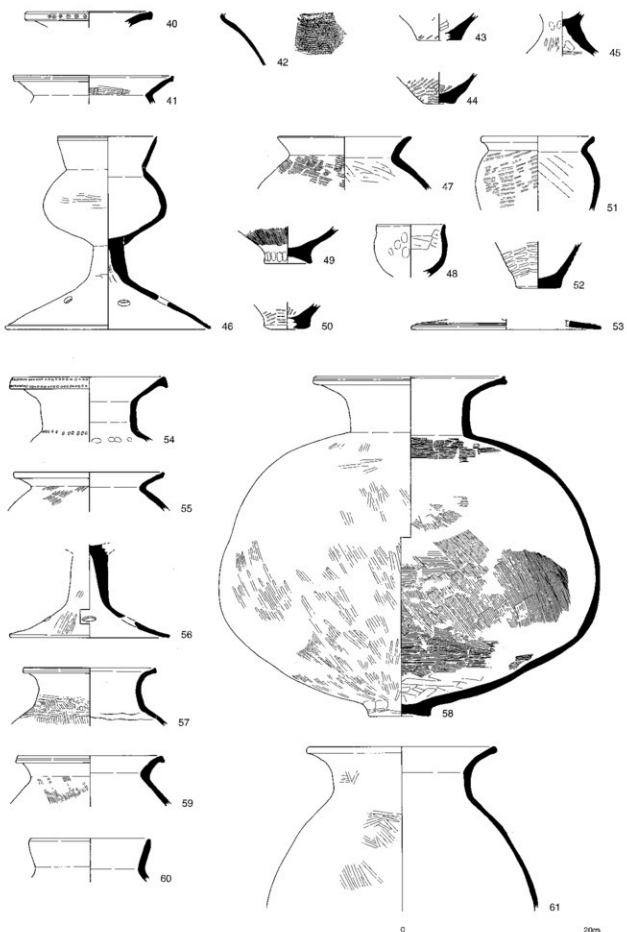
弥生時代前期の土器（2）

図版34



30～37：SD003, 38・39：SD001上層のピット

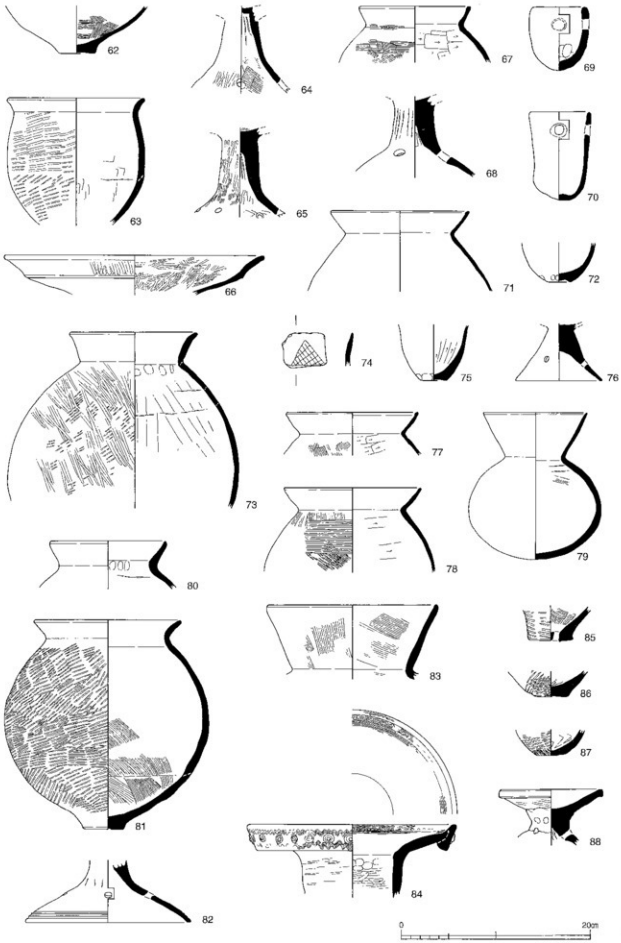
弥生時代前期の土器（3）



40～45・52：ＳＨ001，46・47：ＳＨ003・004，48：ＳＨ007，49・50：ＳＨ006，51・53：ピット，54～56：ＳＫ002，57～61：ＳＫ006

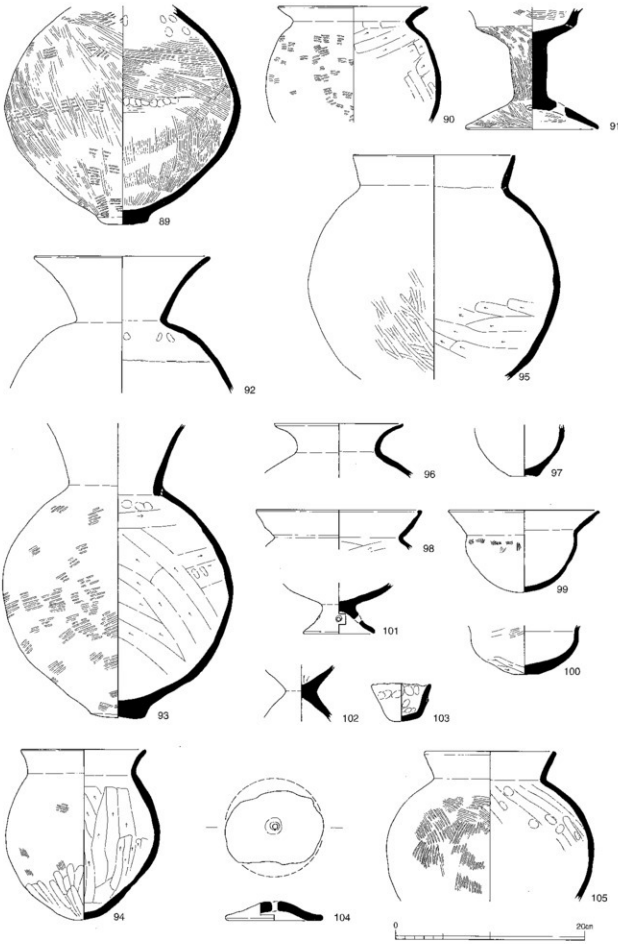
弥生時代後期～古墳時代前期の土器（１）

図版36



62～66：SK006, 67～70：SK003, 71・72：SK004, 73～75・80・81：SK001, 76：SK019, 77・78：SK005, 79：SK011, 82：SD007, 83～88：SD006

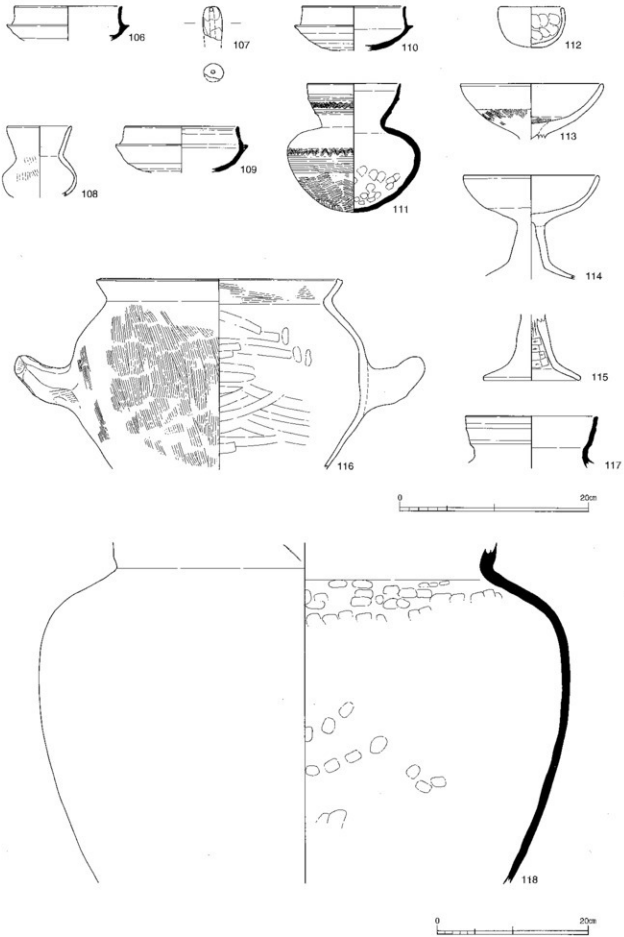
弥生時代後期～古墳時代前期の土器（2）



89～104：SD006, 105：SD004

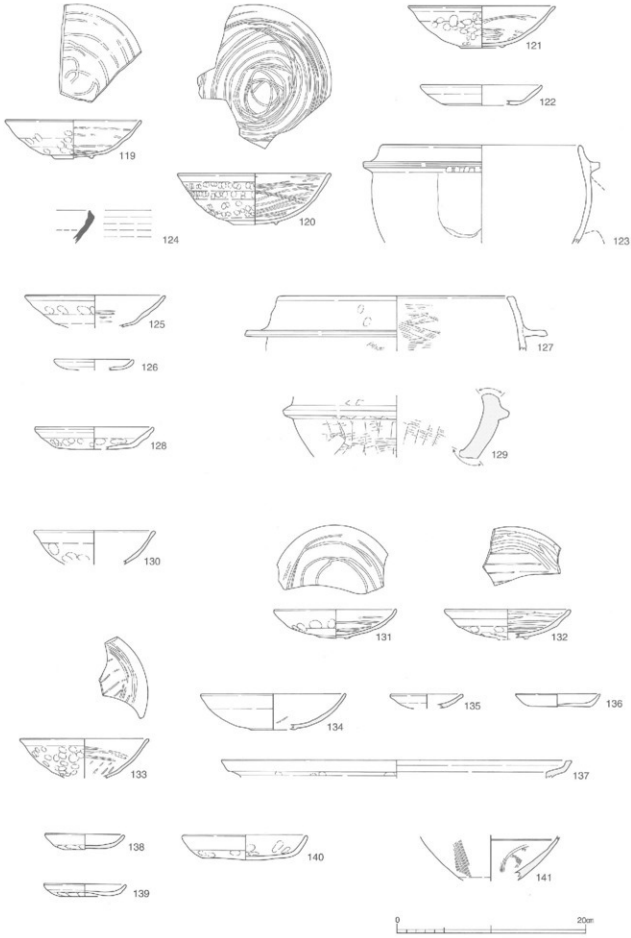
弥生時代後期～古墳時代前期の土器（3）

図版38



106：SA003, 107：SB004, 108：SK008, 109：SK010, 110・111：SK009, 112～118：SK012

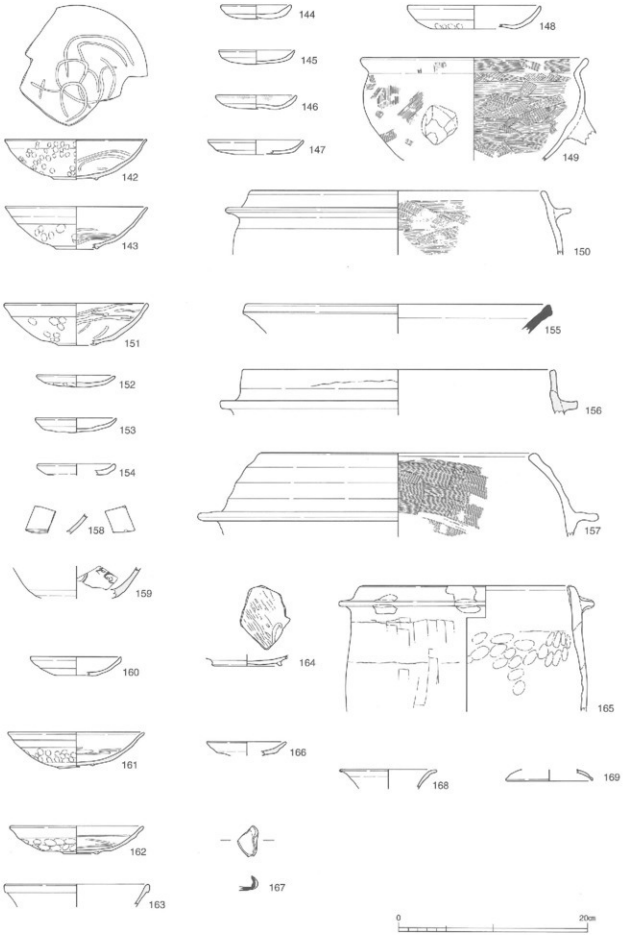
古墳時代中期～後期の土器



119：SB008, 120~124：SB009, 125~127・137：SB010, 128・129：SB011, 130：SB012, 131・132：SB013, 133~136：ピット, 138~140：SE001, 141：SE002

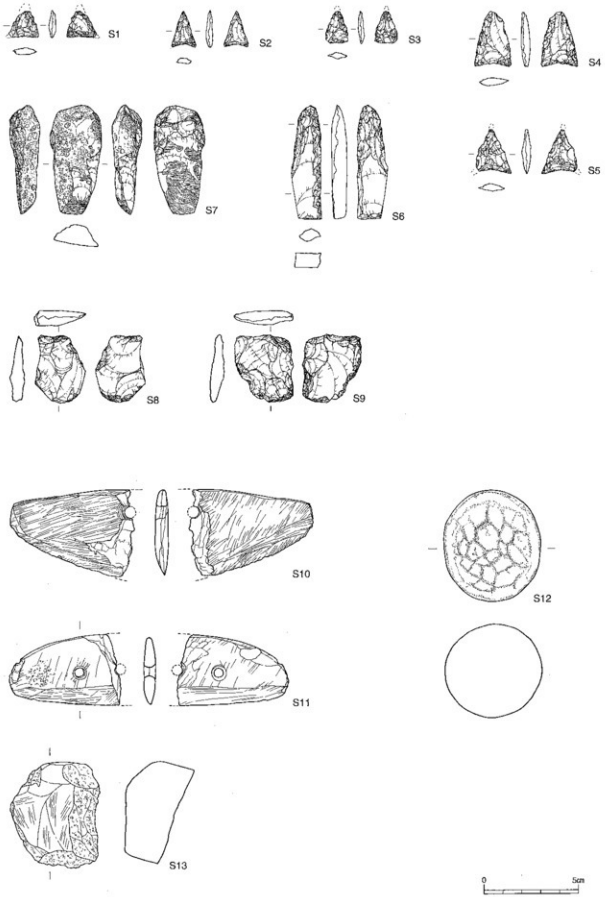
平安時代～鎌倉時代の土器（1）

図版40



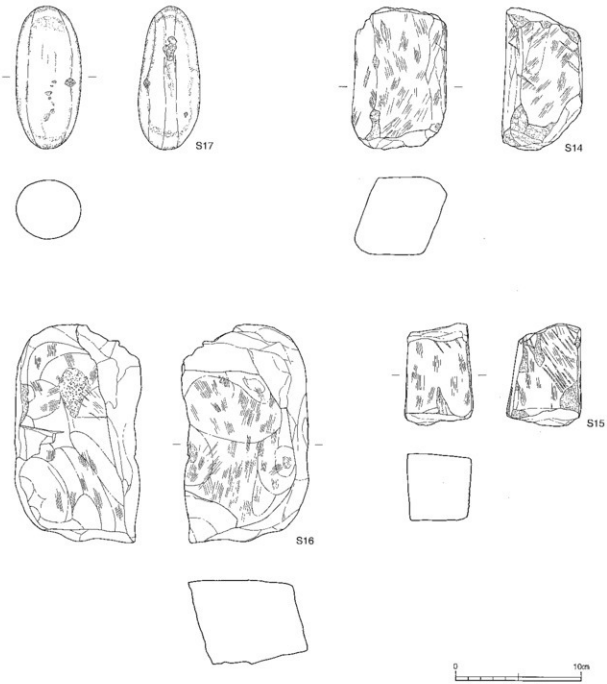
142～150：SK013, 151～159：SK016, 160：SK015, 161：SK018, 162・163：SK017, 164・165：SK014, 166：SK019, 167：SK020, 168：SD020, 169：包含層

平安時代～鎌倉時代の土器（2）



S1・S2・S8・S10・S11：SD003, S3・S4・S6・S13：SD002, S7：SD001, S5・S9・S12：包含層

石器（1）



S16：SK009, S14・S15・S17：包含層

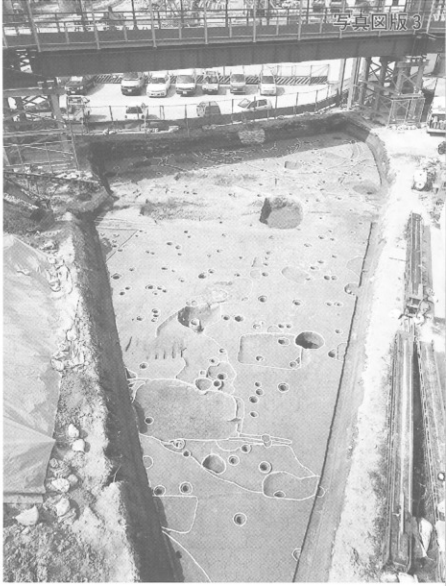
写　真　図　版

昭和23年当時の北口町周辺（米軍撮影）

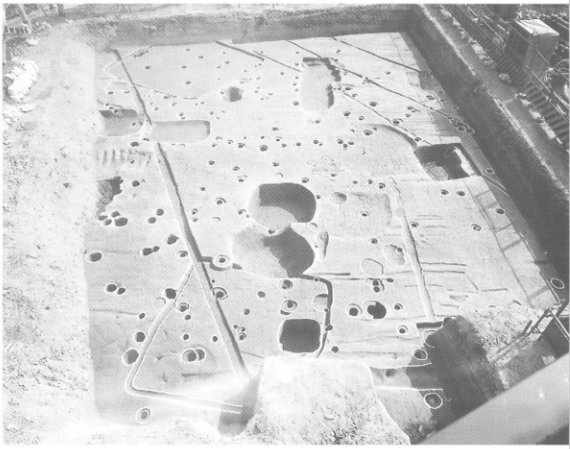
全景写真（１）

１．Ａ・Ｂ地区（北西から）

２．Ｂ地区（西から）



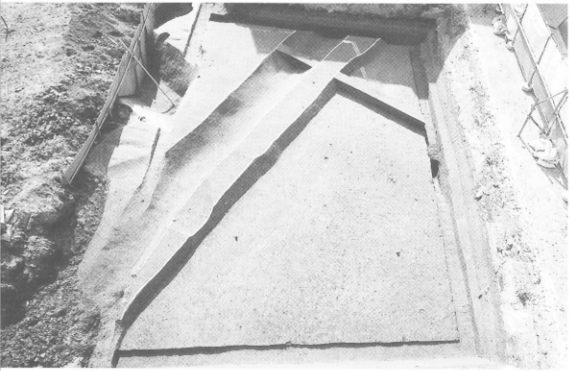
1．C－東区（南から）



2．C－中央区（北から）

全景写真（3）

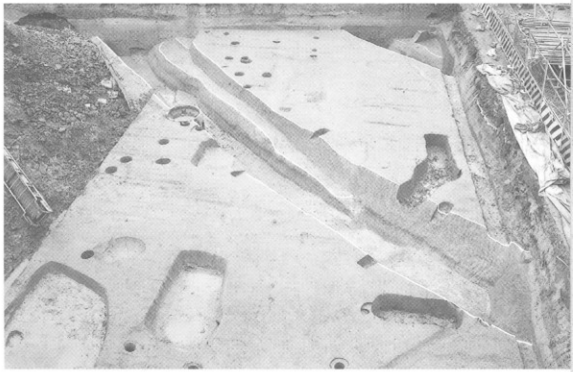
1．C－西区（南から）



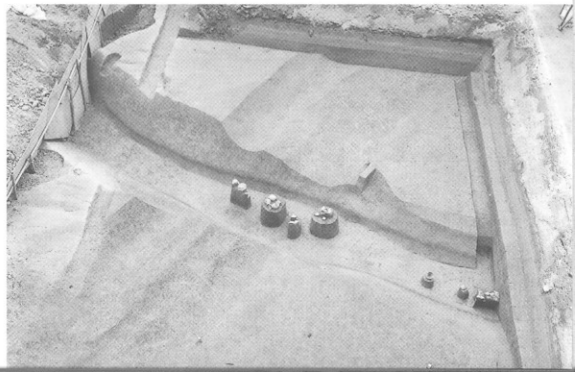
2．C－拡張区（北から）

3．基本層序

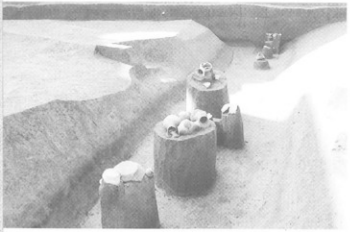
1．溝ＳＤ001～003（南西から）



2．溝ＳＤ002・003（北から）



3．溝ＳＤ002（北から）



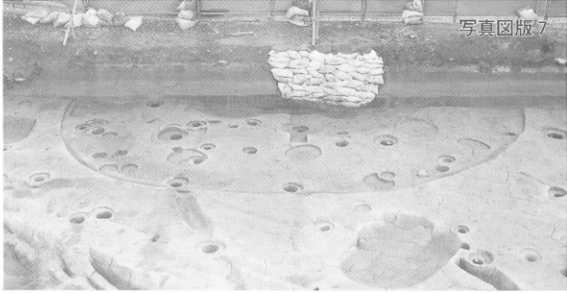
1．溝ＳＤ002・003（南東から）
3．同　右上（東から）

2．溝ＳＤ002　土器出土状況（アップ）
4．同　左（北から）

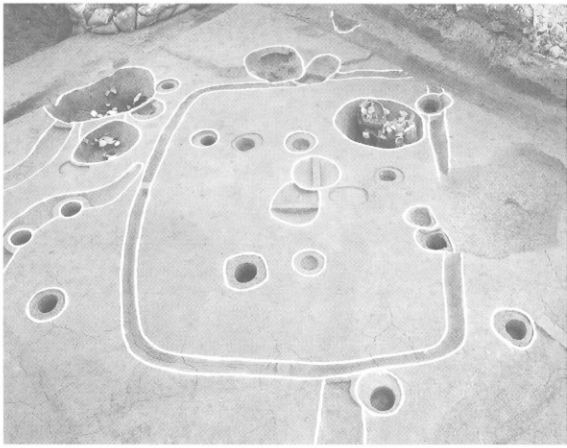
5．溝ＳＤ001断面（北東から）
7．同　右上（南東から）

6．溝ＳＤ002断面（南東から）
8．溝ＳＤ003断面（北西から）

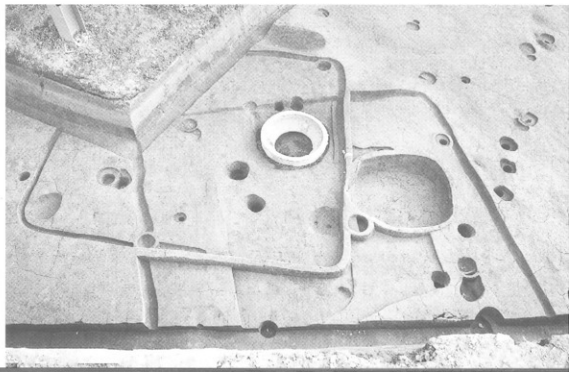
弥生時代後期～
古墳時代前期（1）



1．竪穴住居ＳＨ001（南から）



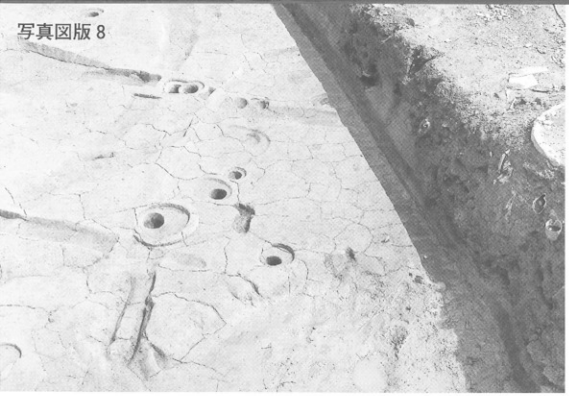
2．竪穴住居ＳＨ002（南西から）



3．竪穴住居ＳＨ003・004
（北から）

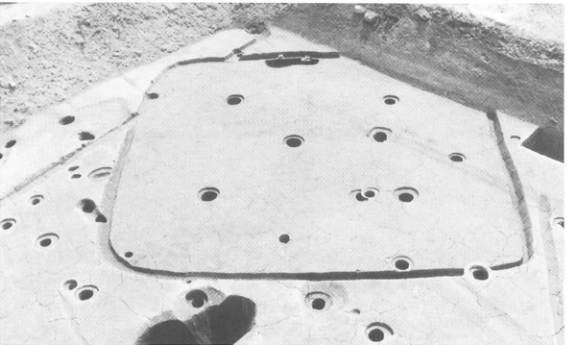
写真図版 8

弥生時代後期～
古墳時代前期（２）

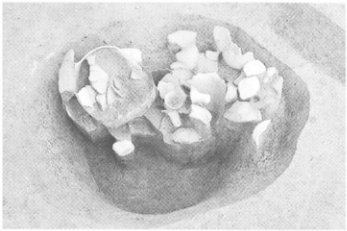
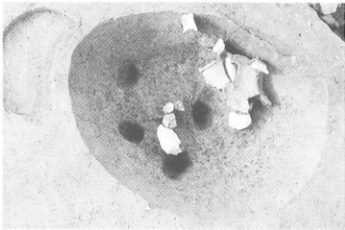


1．竪穴住居ＳＨ005（南西から）

2．竪穴住居ＳＨ006（東から）

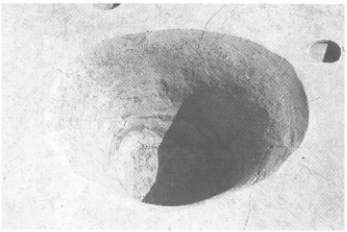


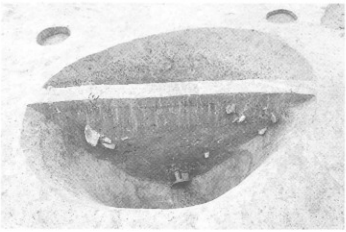
3．竪穴住居ＳＨ007（北西から）

1．土坑ＳＫ006上層土器出土状況（西から）
2．同　上　完掘状況（西から）

3．土坑ＳＫ005土器出土状況（南東から）
4．土坑ＳＫ003土器出土状況（北から）

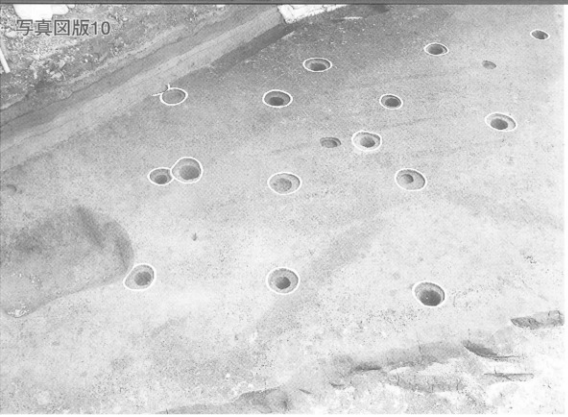




5．土坑ＳＫ001（西から）
6．同　上　断面（西から）

7．溝ＳＤ006土器出土状況（東から）
8．同　上　断面（南から）

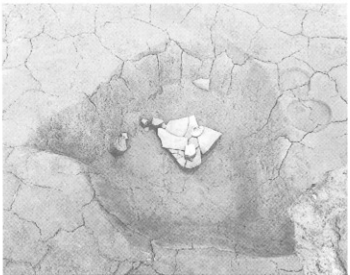
弥生時代後期～
古墳時代前期（4）
古墳時代中期～後期



1．掘立柱建物ＳＢ004（南西から）

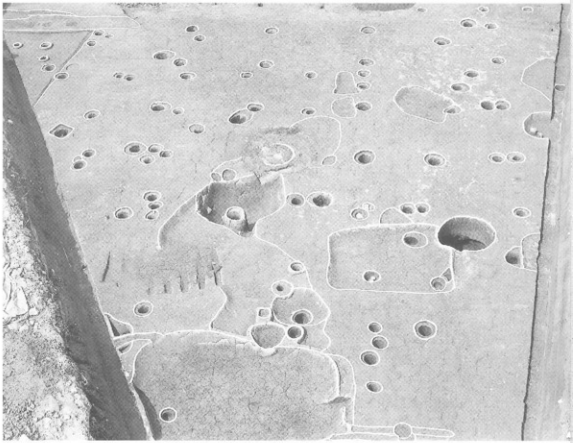
2．掘立柱建物ＳＢ005（南東から）

3．土坑
ＳＫ011
（西から）



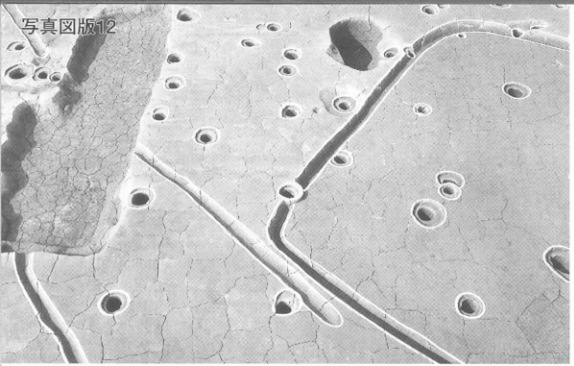
4．土坑
ＳＫ012
（東から）

1．掘立柱建物ＳＢ009（南から）

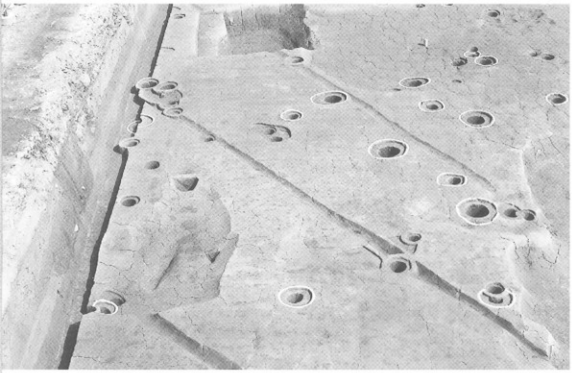


2．掘立柱建物ＳＢ010・011
（南から）

3．掘立柱建物ＳＢ011・013
（南から）



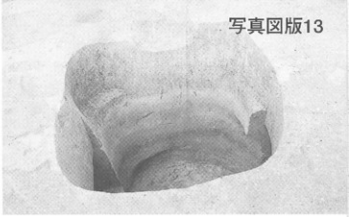
1．掘立柱建物ＳＢ012（南から）

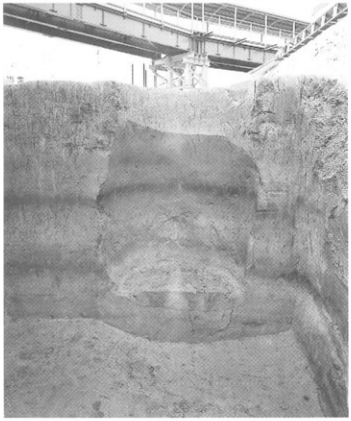


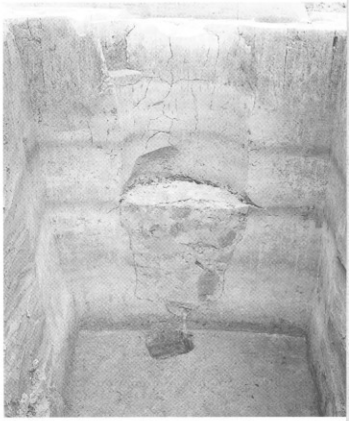
2．掘立柱建物ＳＢ014（南から）

3．掘立柱建物ＳＢ014と雨落ち溝
ＳＤ023～026（南から）

4．雨落ち溝掘削時の鍬痕
（北西から）

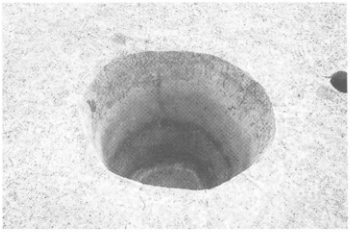






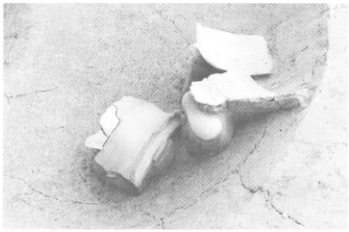
1．井戸ＳＥ002（南から）
2．同　上　断割り（南から）

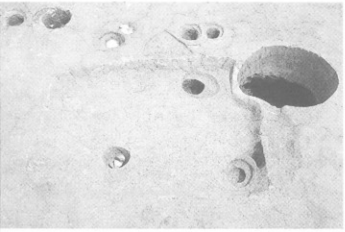
3．井戸ＳＥ003（南から）
4．同　上　断割り（南から）

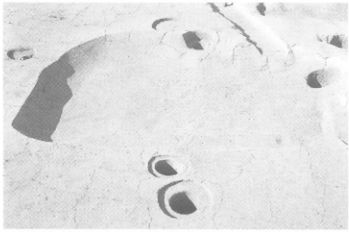


5．井戸ＳＥ001（北から）

6．ＳＢ011，柱穴Ｐ154断割り（西から）

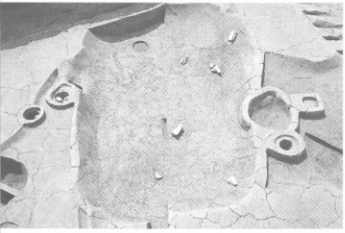


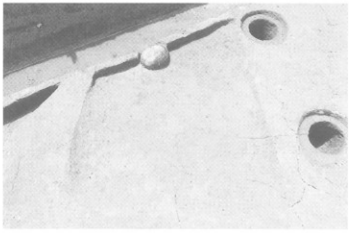




1．土坑ＳＫ013（南から）
3．土坑ＳＫ015（南から）

2．土坑ＳＫ014土器出土状況（東から）
4．土坑ＳＫ017（南から）



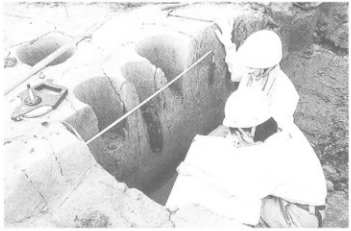


5．土坑ＳＫ016（東から）
6．同　上　断面（南から）

7．土坑ＳＫ018（東から）
8．馬骨出土状況（アップ）

1．再開発が進む西宮北口駅北東地区
3．ボンテリカデッキと発掘調査

2．建物の解体と発掘調査
4．ボンテリカデッキから見た作業状況



5．掘削状況
7．実測状況

6．土器検出状況
8．高校生の発掘体験

1

7

2

10

12

5

13

弥生時代前期の土器（1）

17

18

19

弥生時代前期の土器（2）

20

21

22

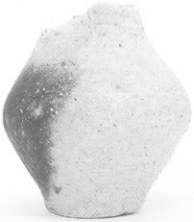
23

16

弥生時代前期の土器（3）

25

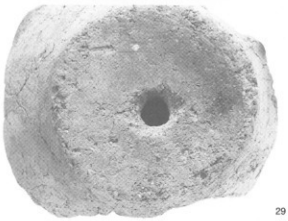
27



26

28

32



29

弥生時代前期の土器（4）

30

33

34

35

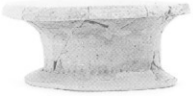
36

37

弥生時代前期の土器（5）

46

48



54

58

56

61

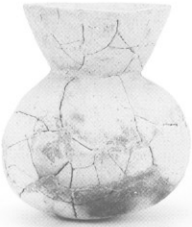
73

弥生時代後期～古墳時代前期の土器（1）

遺物

78

89



79

70

81

84

88

弥生時代後期～古墳時代前期の土器（2）

89

91

90

92

93

95

弥生時代後期～古墳時代前期の土器（3）

94

97

101

99

103

105

104

弥生時代後期～古墳時代前期の土器（4）

108

114

109

115

111

116

112

118

古墳時代中期～後期の土器

119

121

123

120

129

131

136

140

138

139

141

平安時代～鎌倉時代の土器（1）

142

143

145

149

146

152

165

153

161

162

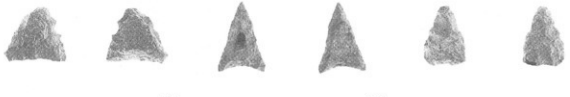
157

167

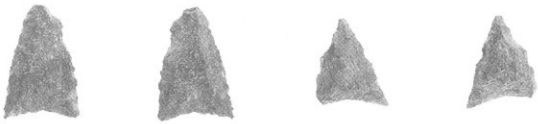
平安時代～鎌倉時代の土器（2）

写真図版28

遺物

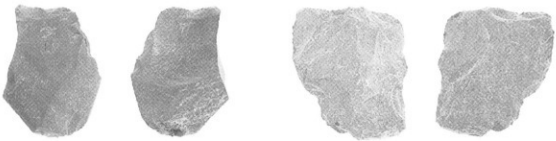


S 1　S 2　S 3



S 4　S 5

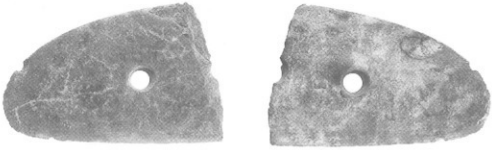
S 6　S 7



S 8　S 9

打製石器

S10



S11

S12

S17

磨製石器

遺物

S16

S15

S13

砥石

報告書抄録

ふりがな	きたぐちちょういせき
書名	北口町遺跡
副書名	西宮北口駅北東地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財報告
シリーズ番号	第228冊
編著者名	種定淳介・中川　渉・深江英憲
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　TEL　078-531-7011
発行年月日	西暦2002年（平成14）年３月29日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
北口町遺跡（きたぐちちょういせき）	兵庫県西宮市北口町４丁目（ひょうごけんにしのみやしきたぐちちょう）	28204	970306（確認調査） 970498（A・B地区） 980106（C地区）	34度44分35秒	135度21分39秒	1997.8.27～1998.3.12 1998.2.19～1998.3.13 1998.7.21～1998.11.18	468m² 1,088m² 1,339m²	西宮北口駅北東地区震災復興第二種市街地再開発事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な以降	主な遺物	特記事項
北口町遺跡	集落	弥生時代前期	溝	上器・石器	環濠の可能性
		弥生時代後期	竪穴住居　7棟	土器	
		～古墳時代前期	掘立柱建物　5棟 溝・土坑		
		古墳時代中期	掘立柱建物　1棟	土器	
		～後期	柵列・土坑		
		平安時代	掘立柱建物　8棟	土器	
		～鎌倉時代	井戸　3基 溝・土坑		

兵庫県文化財調査報告　第228冊

北口町遺跡

西宮北口駅北東地区震災復興第二種市街地再開発事業
に伴う発掘調査報告書

平成14年3月29日発行

編集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL 078-531-7011

発行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷　株式会社七旺社
〒653-0013　神戸市長田区一番町2丁目1

13教Ⓣ1－022A4